第四卷　九月號

婦人運動

職業婦人社發行

詩集

夏草

千家氏は生れながらにして詩人。常に、率直にして飾らず、天眞の流露する所、すでにそのまゝ詩。いまこゝにその近業全部を收めて此大冊なる。岸田劉生氏の裝幀また高雅を極む。

千家元麿著

四六判五百八十頁總布製
定價二圓八十錢送料廿錢

農民詩

野良に叫ぶ

著者は百姓であり、これは百姓の詩である。理窟を何か言はうとすると成心がほの見えるやうな作でなく、生活そのまゝが、百姓生活そのまゝが、かざりけなくつかみ出されてあるものは尊い。

澁谷定輔著

四六判百八十頁上製
定價一圓　送料十錢

詩物語

涙の彼方に

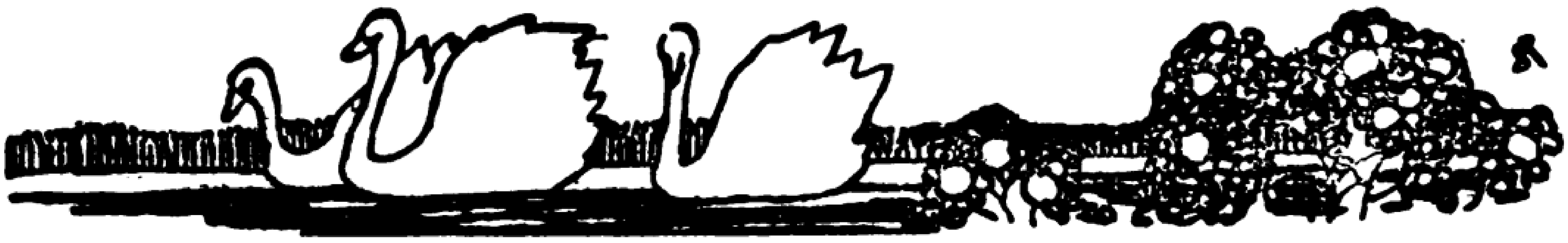
詩聖ロングフエローの名作『エウアンゼリン物語』の全譯。解說――幼き日の輝き――婚約の夜――あはれ勿忘草――生ける屍――さらば故鄕よ――流浪の旅路へ――夢に見る面影――君よ何處に――曠野に泣く魂――永遠の抱擁――墓邊に佇んで。

山內六郞譯

菊半二百頁上製
定價一圓送料八錢

發行所　東京神田錦町三　振替東京二九六三九　平凡社　電話神田(二〇四七)

四六版解放・九月號目次



九月號 婦人運動目次

今月號から、時評は各方面の先輩がたにお願ひして一つ宛寄せて頂くことにした。但今月は暑中のせいもあつたことゝ思ふが、留守中にてさう〳〵間にあはせて頂けなかつた方、又、忙しい用事がたまつて書けなくなつた、と云ひよこされた方もあつて、豫定は外れた。

下田將美氏は、又の名を薔薇閑とも云はれ、婦人公論その他で私たちにおなじみの深い方。

下中彌三郎氏は教員の組合運動に數年來力をいれてゐられるが、又、農民自治の運動にも非常な力瘤の入れ方でゐられる。本誌創刊當時から、影になり、ひなたになつて心添へしてゐて下さるのである。

大竹清子氏のロシア生活みやげはどれを讀んでも面白く、考へさせられる點が多い。氏は革命後のロシアへ邦人として初めて入られたのであつた。

文藝批評家相田隆太郎氏の「若き女性に就て」は、殊に暗示の深いよみ物であろうと思ふ。

五週年を迎へて

秋が來た、覺悟はいゝか

朝夕のこのすが〳〵しいこと、さあ働かう。

職業婦人社では、春頃からの計畫をいよ〳〵この秋に於て實行に移すべくいま準備萬端を整へて乘り出さうとするのである。

社會事情の激しい移りにつれて、共に揺らぐわれわれ三千萬の婦人の生活を思ふたとき、職業婦人社創設の急務を私たちは何よりも強く心に感じた。それは丁度今から五年前。

五年目の今日、わが職業婦人社では發展の第一階段を上らうとしてゐるのである。

私たちのこの喜び

■

五年の間にわが職業婦人社は何をして來たか。

私はこの問ひに答へるために「みる程の人の自由な推量に任せやう」と、敢へて云はうか。では五年の間に何を、私たちは一番痛切に感じたか。

あゝ私たちの力弱さは、私たちの仕事を進める上にどんなにたど〳〵しく重苦しい枷となつたことか。

■

百人の協力は、バラ〳〵な百萬人の力よりも强いと云ふことは、これは餘りに解り切つたことではあるけれど、この解り切つた自明の理を私たちは地でゆかねばならぬのである。

百人の協力！千人の協力！万人の協力 人

◇誌代は全て前納のこと。
◇前金切れのときは、すぐに拂込んで下さい。經營は相變らず困難です。
◇萬一、購讀の意志のない處へ送本される如きことがあつたら、お手數ですがどうぞ雜誌を返送して下さい。

前納誌代 送金法

壹部 貳拾五錢（郵税五厘）
半年分 壹圓四拾錢
壹年分 貳圓八拾錢

誌代は必ず前金の事
送金は振替が一番便利です
誌代の受取證は別に出しません
雜誌發送を以てこれに代へます

大正十五年八月廿八日印刷納本
大正十五年九月 一 日發行

編輯發行兼印刷者 東京市外蒲田町女塚二四七番地 奥むめお
印刷所 東京府蒲田町北蒲田六九五番地 京濱印刷所
發行所 東京市外蒲田町女塚二四七番地 職業婦人社
振替東京六四一一六〇番

〔巻　頭　言〕

震災三週年迎へて

創立後まだ日も淺く、よち〳〵歩きであつたわが職業婦人社を、つれなくも足もとから引さらつて行つたのはあの大震火災であつた災厄を神田神保町の事務所にうけて、のち十數日、燒跡のがら〳〵石と石との間に〟小さく職業婦人社假事務所の所在地をかいた木札を立てゝ暫らくは茫然としてしまつた、あの當時の氣持を私は忘れることが出來ない。

然しあの災厄が齎らした大きな社會的變化は、わけて、婦人の生活態度の上に與へた大きな刺戟は、私たちに、一層痛切に、切めわが職業婦人社が目論んでゐたやうな活動をどんな艱難と鬪つてもやり遂げなくてはならぬといふ信念を與へた。

いろ〳〵な婦人問題が提出されたり忘れられたり、又、諸方面から婦人が立つて活動の意氣を惡く揚げたり、打ちこわしたり、災後のわが婦人會が混沌たるうちに四年を閲してやう〳〵今日では、いのちあるものは永らへ、いのち無かりしものは自然消滅の形で失せて一定の落つきを示しかけたかに考へられる。

社會は、非常な期待をかけて婦人の活動を待ちわびてゐる時だ。わが職業婦人社もいま積極的活動の第二階段を登らうとするにあたつて、こゝに靜かに震災が私たちの生活の上に與へてくれた大きな敎訓をくりかへして心に銘じたいと思ふ。

時評

下田將美
下中彌三郎
奥むめお

公娼廢止と夫の貞操義務

下田將美

公娼制度の全廢、又は改善の運動が旺盛になつて來たのと時を同じうして大審院で横田博士が『夫にも貞操の義務がある』と云ふ新判例を示したことは近來の注目すべき現象だと云つてよいだらう。

横田博士の判决理由を簡單に云ふと『妻が夫に對し貞操の義務あると共に夫も亦妻に對して同樣の義務がある。民法第八百十三條第三號に（妻ヵ姦通ヲナシタルトキ』とあるだけで、夫の姦通の場合を含んでゐない）（夫の姦通が妻に對する離婚原因となさず、刑法第百八十三條（有夫ノ婦姦通シタルトキハ二年以下ノ懲役ニ處ス、相姦シタルモノ亦同ジ」とあるだけで、有婦の夫の姦通を罰する規定はない）男子の姦通を處罰せずとなつて居るが、之は因襲に胚胎する特殊の立法政策に屬する規定であつて、之が爲めに婦が民法上夫に對し貞操義務を要求する妨けとはならぬ」と云ふのである。從來我國の男女間の性的問題中最も不公平であり、最も女性の人格を無視してゐたものは、公娼問題と偏破なる兩性の貞操問題とであつたのであるが、此二つが恰かも時を同じうして新らしく正しい道の方へ進んでゆく端緒を開いたことは些か痛快なことである。

公娼問題については、今日までいろ〳〵の常識的反對論もあれば、常識的贊成論もある。しかしさう云ふ常識的の贊否兩論の可否などは私は問題にする必要はないと考へる。たとへば、よしんば公娼を廢止して見た所で、人間の性の本能ばかりはどうしやうもない必ずや他の方面に同樣な暗いものが出來るだらう。寧ろ、檢黴其他の制度が完全に行はれ得る公娼制度が勝つてゐると云ふやうな議論などがそれであるかうした尤もらしい常識論程滑稽なものはない。公娼問題と人間の本能とを結びつけた所が滑稽なのである。

人誰れか性の本能を否定するものがあらう。本能は人間が此世に生きてゐる

る限り何の力を持つてしても滅却せしめることなどは望まれないことである。トルストイの所謂絶對禁慾による人類滅亡の理想は、結局言葉通り理想に相違ないものである。私達は、教養の力によつて人類が、本能の淨化をせよと云ふやうな美しい夢のやうなことを云ふ氣は更にない。常識論者の云ふやうに、性の本能は、公娼なくしても他の方面に必ず現はれるであらう。しかしそれなるが故に公娼を有置せしむ可しと云ふ理由はどこにもない。

私は公娼問題はたゞ一つの簡單な理由だけできまると考へる。曰く人身賣買、女性のドレイ化が不都合だから廢止せよ、と云ふだけで足りる。或ば公娼に自由を與へ、現制度を改善すればよからうと云ふ說を爲すものもあらう私はこれに對して答へる。いかに自由を與へ、制度の改善をして見た所で、公娼は遂に女性のドレイ化である。人格を沒却した物品賣買である。男女兩性は等しく同じ本能の欲求を持つてるるのに、男性たけの本能滿足の爲めにドレイ制度を有することがいけないのである。公娼制度其ものは廢止するがいゝ。爾後のことは自ら別問題である。

夫の貞操の義務は、當然今日より前に實現すべくして實現されなかつたものので、これ亦當然のことであらう。妻の財產權が問題化されてゐる世に、貞操が猶平然として不公平な法律によつて定められてゐるのが笑止な位いである。經濟上、政治上社會上の男女平等の主張もいゝ。しかしかうした因習的の惡例に今まで眞劍な婦人の運動が少かつたことは、些か物足らないことであつた。すでに新例も開かれて見た以上婦人はこれを善用して、社會的に舊慣を根本的に打破するの覺悟をもたれたいものである。

婦人運動をながめて

下中彌三郎

一

日本の婦人運動をながめわたして淋しさを感ずるのは私だけであらうか。

鬪士がないのではない。

思想家がないのではない。

實際運動家がないのでもない。

それ〴〵立派な人達が、多數にあるのである。けれども、それが少しも新しい進出を見せない。進出しさうに見えるあこからくづれて行く。まとまりさうになりながらまとまらない。何故であらうか。それにはいろ〳〵の理由があらう。けれども、婦人自らの內部において、燃燒する已むに已まれぬ要求がない。或は足りないといふことがその重なる原因であるまいか。

二

多數は起ちあがる氣力さへないほど

にも虐げられて居り、少數の先覺者はともかくも或る程度までは「滿ち足りた」生活者である。

自覺ある婦人は已れ自らの境遇が他の大多數にくらべては先づ善い方であるといふところから、それ等の人々の間において考へられる問題は、自分自身の問題としてよりは同性間のしいたげられてをる問題としてゞある場合が多い。

同情から起る婦人運動であつて、體驗から起る婦人運動でないと云ふこと知識階級的運動であつて、純ロプレタリアートしての實感から起る運動でないといふこと、このことが今日の婦人運動をだらしないものにしてしまふのではあるまいか。

三

勿論婦人運動は、その現に置かれてある婦人の歴史的地位からの解放を目的とするものであるからして、それは知識階級的先覺者たち自體の上にも現實に體驗せられつゝあるところのものであるには相違ないのだから、その點から申せば、いかなる婦人もみな婦人運動の當体であるのだが、さてそこに「われ／＼はまだよいが、あの人達の生活こそ」

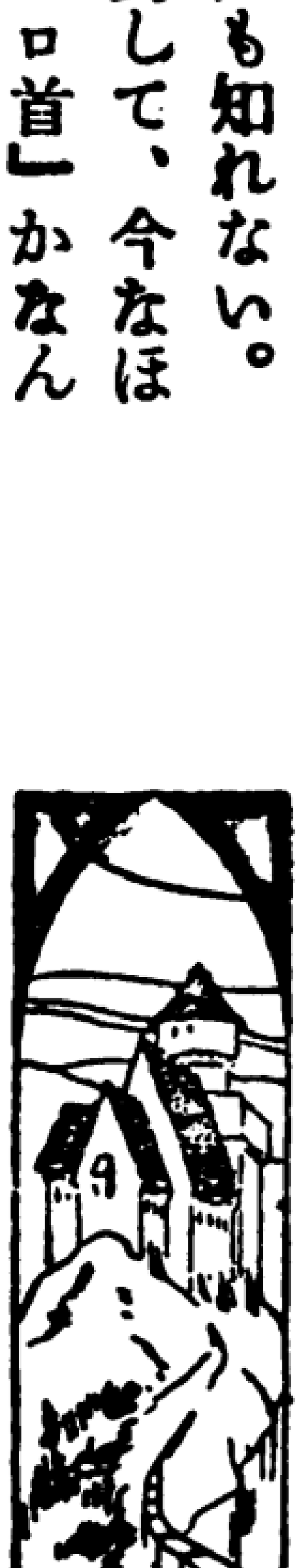
と考へるのと、

「なかにはある程度の自由をもつ人もあるが、吾々にはどの點からいつても人間的自由が許されてないのだ」も思ふ立場から行動するのと、そこに大きなちがひがあるやうに思はれる。まして、自分自身の生活が、歴史的習俗と社會的環境の中にあつて、畢竟よりよきドレイであるに過ぎないのだといふことを、明かには自覺し得ないで、婦人運動を一種の「晴れの仕事」「見え坊」であるやうに考へてをるやうな婦人運動者が少なくないときにおいて、その運動に眞劍味を缺くことは蓋し已むを得ぬことであるのかも知れない。

社會が、婦人運動に對して、今なほ物珍しさを感じて「ロクロ首」かなんぞをのぞく氣持でながめて居るといふのも、畢竟、まだ／＼社會生活の核心を搖り動かすまでの底力を示さず、末梢的な、ヒヤカシの對象にしか價しないと思はれるやうなところを出つ入りつして居るに過ぎないからであるまいか

四

婦人なるが故に、「婦人としては」の條件づきでその言論その製作が特に高く評價されるといふやうな傾向のある間はまだ決して婦人の人格的價値が社會的に認識されてゐるとは言へないのだ、といふわかり易い條理さへも反省しないで、たとへ反省してゐてもその反省を生かさうとはしないで、さかしまに、その特殊扱ひをよいにとにして「婦人ですから」を押し賣りしやうとしたら、その特殊扱ひからの評價をよい氣になつて澄ましこんでゐたりする



母子扶助法の制定を捉進せよ

奥むめお

内務省社會局が母子扶助法を制定するために準備をすゝめてゐることは、まことに時宜しきを得たものである。今や乳兒幼兒の死亡率がわが國で非常に高いのは、これは經濟事情に原因する事多く、まづしい家庭に生れたものが餘計に死んでゐること、又近頃やかましい不良少女の問題も、畢竟貧困に依る親の注意の不行屆きから來てゐることが多いこと、などから考へても、今日のやうに生活難の勢すさまじく、社會生活の復雜な裡で頼り少ない寡婦やヵ婦同樣な孤立無援の女の手一つで幼ない子供を養つてゆかねばならぬこいふ事は、實に重荷すぎるのである。

×

一體、親がその生れた子供を育てるこいふ事はこれは當り前のことであるが、然し、子供の養育教育の責任をその親にばかりせおわはせてゐたのは大きな間違ひであつた。

今のやうな社會では、貧しい家庭の子供は生れると同時に衣食にもことを欠き、やがては、非衞生的、反家庭的なはげしい勞働にも驅使される。貧しい親の下に子こして生れて來たこいふだけでその子は、精神的にも肉體的にも必要な保護も適當な機會も與へられないのである。

教育に於てみても、日本では、教育令第三十三條で、家庭がまづしい場合には、その子供は學校へ入ることを猶豫され、又は免除さるといふ規定がある。そして、この規定の適用をうけて、教育をうけないでゐる者も大分多いのである。ドイツで『獨逸人である以上、兒童は肉體上、精神上、且つ社會上教育をうける權利がある』こ規定してあるのなどに比べて、國家が、子供のために當然せ負ふべき責務を如何に多く見のがしてゐるかを知るのである。

×

近頃頻りに起る悲慘事――糊口に窮した母親がその子こ共に線路の露こ消ゑたといふのや、生活難の結果親子五人が縛りあつて海に飛込んで果てたといふ事實など、何を我等におしへるであらうか

×

おくればせ乍ら子供といふものゝ社會的存在理由に氣がついた政府が、その養育費の負擔を、たとへ一部分にしろ引受けやうといふことに考へて來たのは喜ばしい限りである。

聞くところに依るこ、扶助をうけなければならないものゝ標準範圍を都會地では寡婦が子供一人の場合は生活費四〇圓、夫婦ならば五十五圓以下、子供一人を增す度に十圓づゝこいふ標準に依つて、扶助することに決めたこいふ、然しこれは、貧困の程度とか範圍とかの調べは六ケしいもので、國家は適當な設備を以て、全て無產階級に屬する子供の養育費を當然負擔するところまでゆかなければならないのである。

×

なほ聞くところに依るこ、社會局は大正十六年度豫算中に、この法案のために二百萬圓の新規要求をする計畫がなつてゐるといふが、財政緊縮の絕對方針で押してゐる現政府が、これを直ちに承認するかどうか、頗る疑しいといふのである。

私たちは擧つて、この法案の一日も早く實施せられるやうに輿論を高める事を怠つてはならぬ。

ペーチャの死

大竹清子

五月に入つてめつきり暖氣を増した。夏の來方は去年より早い樣た。

昨年の別莊のかみさんが、泣きついて來ないと思つたら家の手入れをよくせぬと云ふかどで、政府から家を取り上げられたのだと云ふ。子供は自殺をするし、彼女も泣きつらに蜂こ云ふわけだ。どこの國でも後家になるこ悲しみの潮は一時に押しよせる。ひそかに自分の生ひ立ちに立ちかへる。涙！涙！――これはモスコウに於ける私のある日の日記の一節である。

私は今遙かに、別莊のかみさんなる者の一家の薄命を想ふ。

あの奇形的に小さな生れつきの、人の好きさうなペーチヤを忘れる事が出來ない。

ママ、ママ、

彼はひつきりなしに、家にさへ居ればママの跡を、くつゝき廻して居た。

ペーチャは私共の用事を達して、僅か許りの金を毎月貰つて居た。初めての月であつた。彼は金を貰ふこすぐに、共産黨員が恰も約束の樣に着る、黒い革のヂヤケツを買つて着てゐた。その上にケプカを被つた彼は、風彩許りはまぎれもない、共産黨の青年であつた。

ママは居ませんか？。

彼は又しても、母を索しもとめて、私の部屋へやつて來た。

彼女は居ません。

私は答へた。

ママなしでは生きて居られない。

彼は這入りもせずに、私の部屋の扉に手を掛けたなり、中を見廻して、獨語の樣に云つた。

私のママは永久に還らないのに。

私は羨しさうに愚痴つた。

こんなにまで熱愛してゐたママを捨てゝ彼は自らの生命を絶ち切つたのである。

夏も過ぎて、秋風の身に浸みる頃、私達夫婦は、彼等の家を引拂つて、苦心の結果住宅權利を買つた、モスコウの町の中心にある家へと、引越したのでむつたにその時、荷物の手傳ひをしたり、最後に荷馬車の上に、乘かつて來てくれたのはペーチヤであつた。彼は私達の荷を、運び込んでしまふと、云ひ惡くさうに云つた。

もつと私を使つてくれませんか？、

彼は、ほんとに僅かな月給にも、來月から離れなければならない事を想つて、ひどく悲しんで居るらしい。けれども私のこころでは、この氣の毒な若者を泊め置く場所も無いし、又彼にして貰ふ用事と云ふものもないのであつた。

やがてモスコウの、名許りの秋は何時の間にか、雪をもたらす冬になつてゐた。

此頃ではポツ〳〵日本人の入露も許され、私達は、モスコウ通過の、日本人客を必ず迎ふるの光榮を有してゐた。

その日も誰であつたか、獨逸へ通過の、客と共に晩餐の卓る圍んで居る時であつた。いきなり扉を排して、頭からすつぽりと包んだ、田舍婆さんが、まろび込むなり、私に抱きついて、おひ〳〵泣き出した。

ペーチヤが自殺しました……鐵砲で……。しやくり上げを呼吸の下から、きれ〳〵に彼女は云つた。涙はぼうだとして、灰色の瞳から、赤ら顔の皺の間を流れ傳はつた。まぎれもない、ペーチヤがあれ程までに、熱愛してゐた母親オリガ　イウゲニーナに違ひない。

どうして〳〵、

あまりの驚きに、私は矢繼ぎ早やに問ふた。

昨日、あの池の傍の林の中に、あの鐵砲を樹の枝に縛りつけて、自分の足で引金を引いて――村の人が見つけた時

には、もう紅い雪は、固く凍り付いてゐたのです。

あの鐵砲とは？

私は驚き叫ばずには居られなかつた。

私達は、ひと夏を、モスコウ郊外の百姓家の、ペーチヤの家に移り住むと間もなく、獵銃を買つた。外國人である故に、買ふ時に樣々な面倒が伴ふから、凡てをペーチヤの所有にして買ひ入れたのであつた。銃は買つたなり私達は手にも執つてみる日もなかつた。それ程ペーチヤは銃を自分の手から離さなかつた。新しい磨きのかゝつた、形のいゝ銃をかたにして、彼は子供の樣に喜んで、每日弟のボーリヤと共に、村中を練つて歩いて居た。

彼を圍んで、村の若者達は、代る〲銃を手にして、遊んで居る一團を、私は、野いちごを探りながら、或は華をあさりながら、林の中でよく見掛けるのであつに。獵銃はそのまゝペーチヤへの置土產となつた。私達の置土產がペーチヤを死に至らしめやうとは、そして今ペーチヤの死骸は、この夏、私が住んで居た部屋に、橫たへられてあるのだといふ。

まだ葬式が出せないのです……

消え入る樣に彼女は、こう云つて聲を呑んだ、なけなしの金をはたいて汽車に乘つて、何のために彼女が、吾々の樣な外國人の處まで、泣いて來たのであるかは、以上の一言でもよくのみ込める。

それにしてもペーチヤが、何の原因で死なねばならなかつたか。

中學校を卒へて、はたちだと云ふのに、ペーチヤはまるで子供の樣に小さかつた、をまけに薪を割る時に、誤つて打ち切つたのだといふ、指の無い右手には、夏でも黑い布が厚ぼつたい手袋の樣に卷かれてゐた。だから私はいつも左手を差し延べて、彼に握手をした。人の好ささうな微笑が、いつも消えた事のない彼のどこかに、なぜか私は一種の運命づけられた、悲しみの影を感受せずには居られなかつた。つまり私は、彼を見る度に淡い憐れみに似た感情が湧いてならなかつたのだ。彼がどこでをだてられて來てか

或は又、どうした事の、はづみであつたか、家の税金の問題で、私達に向つて、不當な、約束外な金を、執拗にむさぼり取らうとした時でも、私は憐れみこそすれ、決して彼を悄めなかつた。

いまこの國で、一番問題とされて居る、失業者の一人であつた彼が、貧しき母や弟妹を顧みて、自らの不甲斐なさから、死を決したとすれば、それは現今のソヴエートロシアの生んだ犧牲者として、彼が選ばれたのである。さうだとすれば、最後に私達と別れる時に、

もつと私を使つて下さい、

の一言は、憐れにも斷腸の叫びであつた。私は心から一枚の札を彼の悲嘆にくるゝママの手に手渡して悔みを述べるしたから、この、をしやべりで人の好いをふくろが、失業の息子に對して、どんなにがみ〳〵と喰つてかゝつた事かと嘗つて見せつけられた、母子のいさかいの場面をすら想い起すのであつた。

死を決した彼が、よろめきながら獵銃を肩に、あの黒革のジヤツケト姿で、いつも私達が泳ぎに行つた林の中の村の池――ツルゲネーフを思ひ出す樣な林の中の池であつた――の邊りに、死に場所を求むる、憐れな小さな彼の姿を彷彿とする。もし彼の死が女の事からであつたとすれば、更に若い不具の彼がいぢらしくも想へる。

私は、彼の妹のマーニャが、よく女の事で自分の兄に向つて、ひやかしてゐた事を想ひ出す。ある御天氣の好い日であつた、豚小屋の前の青葉の小徑を、三人の若い女が通つて行つた時、マーニャが遠くの牛小屋に働いて居る兄を大聲でよびかけて「ペーチャよ眞中の人をよく見ろ」と云つた、彼はシャベルに一ぱい盛り上げた牛の糞を、持ち上げたなり、妹のいふ通りを打ち見やつて、滿足さうにほゝゑんだ。

「あのまんなかに歩いて居る、ローズ色の着物を着た人をペーチャが一番好きなんだ」と、マーニャはいたづらさうに、目で笑つて、ぢやが芋畑の端にひなたぼつこをしてゐた私に說明した。

女性について

相田隆太郎

結婚前の若い人の生活の興味を占めてゐるものは異性のことだらうと思ふ。

私は男性だから女性のことには人一ばいの興味をもつてゐる。色々の點で。

人生の勉強といふことは異性を知るといふこと〻密接してゐるやうだ。

女にとつては男性を知るといふことは人生の重要な勉強である。男にとつては女性を知るといふ事が重要な勉強である。

僕はいろいろの事情から今迄殆んど女性といふものを知らないで來た。そして二三年來所謂近頃の若い女と少し知り合ひになつたのだが、女といふものが案外月並の考へ方できかなしいのに驚いた。

僕の頭にあつた女は、本や雜誌の中にあつた女だつた。僕の知つてゐた女は雜誌の小説などの中にある女であつて現實の女とは違つてゐた。

現實の女といふものは考へ方から行爲から調子が低い。小説の中の女は、利口でもバカでも毒婦でも、どこか調子の高い實にいゝところがある。

僕は女といふものは案外つまらぬものだと思つた。然し僕は女といふものを買ひ被つてゐすぎたらしい。

僕は以前はフエミニストだつたが近頃さうでなくなつた

女は要するに女だ。男ではない。こんな風に考へるやうになつた。

然し女とつき合ふやうになつて僕は、かなり通俗な見方や考へ方を理解するやいになつた。

女は思索に堪へない。

女は嚴格な氣持に堪へない。

女は卒直でない。

女は正直でない。少くとも男の正直さとは、性質が違ふ

女は感覺的である。

女は意志を持たない。

すべて女は調子が低い。

かう並べて來るとどうも非難的になる。

然し女といふものは實に可憐でいゝものだ。例へばひとり寂しくなつてホロ／＼と泪をこぼす樣の時、未來のあこがれや幼時の憶出を語る時、何といふ女らしい優しみをもつことか。

女が男に克つ路が一つある女が眞に女となることである單なる服從的な美良さなどはいけない。もつと健康な優しい美しさ。生き／＼した健やかなコケツトリイ、しかも意志的な生活感情、洗錬された理性を持つやうになつたらそれこそ素晴らしい。女性參政權など欲しければ異議なくとれる。

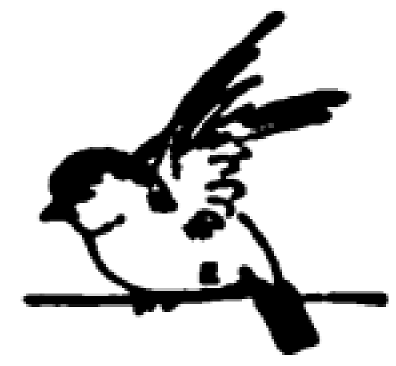
女は、男は女を無暗に服從的にしやうとしてゐるやうに思ふが決してさうでない。男にとつても女が單に羊のやうに從順であるだけでは寂しい。それでは男は女からは殆んど學ぶことが出來ぬ。彼女は女性の從順といふ一つの窓をひらいてゐるにすぎないから……。

要するに女がひそめてゐるいろ／＼のものをもつと開いて伸び／＼と成長してくれることは男性にとつても望ましい事だ。その過途時代にはブリウストツキング結構、モダンガール結構、いろ／＼の風變りのものが出るのも無駄ではない。

何しろ第一に賢くなつてほしい。こんなこと云つては敎養ある少數の女性にはすまないが。

女性が單に從順で、單に無智で、生活意志が稀薄であることは男性にとつても恐ろしい損失ではないか。

近頃の女が賢くなりつゝあるに拘はらず、多く感覺的な賢さにすぎないのを物足りなく思ふ。（一五、八、十一）



高群逸枝

今日以後の家庭は、誰からも支持されない、いや、誰にも支持せよと義務をおしつけない、純粹な自然的な經濟生活の上に築かれる。

それ故に、もつとも純粹である事の出來る男と女、或ひは親子の純情を元にして打建てられなければならぬ。

▲

今日にあつても、最も純情的な女、女らしい女は夫から扶養されてゐることを、それはあたり前の事だとは決して考へてゐない。從つてそこにはいつも、感謝の念が伏在してゐる。

「もし出來るならば」と、その婦人はいつも考へてゐる。

もし出來るならば、自分も生産的な仕事について、夫の負擔を幾分なりとも輕いものにしたい。

▲

これに反して男女を捕虜とし、もしくは道具として强制的に家庭を作らせておかなければならなかつた社會制度は、女には扶養される權利を、そして男には女に向つて、家庭の中の仕事を命令する權利をもたせた。

そこで、扶養することの出來ない男に向つては、甲斐性のない男、意氣地のない男と罵倒する權利が女にあり、子を生まぬ女、家政の下手な女に向つては、女の屑、ごくつぶしと罵倒する權利が男にあつた。

▲

かうした険悪な家庭が、おのづから反動的な空氣をかもし出す筈であることは云ふまでもない。

そして、ものごとの破綻は多く貧乏にある。貧乏になつて來ると、つい夫婦喧嘩が多くなる。さうしてそこには、人間の生地の最も露骨な發露がある。もうそこには、制度も、道德も何もない、男はいふ

「俺が養つてゐてやるのだ、でないなら、お前らなんかに生活の能力がごこにある。」

女はくやしいから、

「よし、では養つて貰ふまい、あゝ、何か仕事があるなら、なぜ社會は女に仕事を與へないのだらう。又、女はなぜ子供を」

と考へてくると、子供に對する愛情といふものほどつらいきづなはない。女は子供ゆえに汎ゆる事をしのばねばならぬ。

▲

婦人はいつでも、何どきでも、生存の擁護されてゐる社會を求める。ことに子供のために、一層さうした社會が彼女には望ましい。

しかし勿論それだけではない。純粹な愛情から成り立つ男女の關係、すなはち夫婦の關係のためにも。

なぜなら、自分に生活能力がないときには、思はぬ男の妻にならねばならぬ事もあるし、又、子供や自分の生存のため。つい、夫を道具視するやうな弊におち入ることもないとは云はれない、たとへば夫の死といふことに關聯したその妻の第一の考へは何うあるかといふのに自分や子供生存の道が斷たれるといふ事である。さうして愛故の悲しみは、多くの場合そのつぎになるつまり家庭の生活は夫が支持するといふ形式から養成された意義夫を知らず知らず道具視してゐる意識である。



和蘭に於ける出産制限の状況

エム、ヤコブ

一

オランダに於ては久しい以前から出産調節が自由に實行されてゐた。約半世紀前の一八八二年私は妊娠が社會的道徳的並に醫學的理由から望ましくないことに、婦人に避妊法を敎へたことがある。それ以來和蘭では出産率が加速度に減少した程避妊法が一般に普及した。從つて同國では舊敎や熱心なカルヴヰン派の少數者を除いては大家族は容易に見られなくなつた。

出産制限の反對論はいつも同じである。五十年前にオランダで主張された論法が、今日、米國やそのほかで繰返へされてゐる。

出産調節に對する第一の反對論は民族が自滅するといふ事である。すなはち婦人が避妊法を知るならば子供を産なくなるであらうと云ふのである。此の議論は今日では男子の側からばかり出てゐる。ところが普通敎養ある女の母たることの希望はなか／＼强いもので、これを全然又は幾分でも取り去らうとすることは殆んど不可能である。

然らばオランダは此の問題に關して如何なる經驗を世界に提供せんとするのであるか、

二

一八五〇年（同年以前の統計は不完全である）から一八八〇年に至る間にオランダでは出産率が次第に增加して人口千に對し三七、六と云ふ最高點に達した。然るに一八六〇年から今日までは出産率は非常な割合で年々減少し一九二〇年には人口千に對し一九、三を超えなくなつた。斯くの如く出産率は殆んど五十パーセントの減少を示したに拘はらず人口は年々急速に增加してゐるのである。

是れ實に出産率が減少すれば死亡率も亦同時に減少すると云ふ事實を示すものである。而かも豫期されなかつた事には、死亡率の減少が出産率の減少から比較的高かつたので、從つて、子供の出産が少なかつたに拘はらず、年々人口の增加が多くなつたのである。

以上の事實に徵すれば、避妊法が一般に普及すれば、民族自滅の結果を來らすと云ふ反對論の誤りであることが

明かになる。一八八〇年和蘭に於ける一ヶ年の人口增加率は千に對し一一、四であつたのが、今や一七、八を示すに至つた。然らば國民の數が國家の存續を危險にならしめない程度に出產率と死亡率との調和を保たしむるにはどうすればよいのか蓋し出產率は如何に減少しても、人口千に對して一〇又は一二より降つてはならない、即ち出產率が更に五十パーセントを減ぜず又人口千に對し出產率一〇以上の減少を來たさない場合に於て出產率と死亡率との權衡がとれるのであらう。オランダに於ては年々出產が死亡に超過しなくなるかも知れない。だがこの狀態に達するには更に半世紀を要するのである。而して其間にオランダの人口は二千五百萬に增加するであらう。斯かる多數の人口はオランダの如き小國には過剩と云ふべきである。蓋し現在では一平方哩に三五三、六人が住居してゐる人口は現在七百萬である。

三

オランダ國の風紀衛生並に國民の幸福上重要な一事は一八八〇年以後結婚數の增加と婚姻年齡の低下したことである。從つて若夫婦が出產を豫め制限しなかつたならば子供の數は增加したに相違なかつた。一八八〇年に於ては婚姻百の中妻の二十五歲以下の者は五、九〇であつた。然るに一九二三年には此の割合は九、〇六となつた。又一八八〇年に於ける婚姻數は人口千に對し七、五であつたのが、一九二三年には八に增加してゐる。オランダに於ては他國に比して離婚の數が尠いのである。

米國に於ける出產制限に對する最も有力なる反對の理由は、出產制限は風紀を頽敗せしむるだらうと云ふことである。即ち出產制限の實際方法が社會一般に周知されるならば婚姻外の異性間の交際が普く行はれるだらうとの心配である。

私は此の反對論を聞いて非常に驚いた。どうして米國婦人の風紀を斯樣に判斷せねばならないでしやうか。一體米國婦人は避妊法を知らないから貞操を守つて居るのだと誤解して差支へはないのでしやうか、私はどうしても斯樣に信ずることは出來ないです。米國婦人の品性に就て私は良い印象を受けてゐる事を自白せねばならぬ。

私は反對論に敢て問ひたい。避妊法の知識に依りて其の基礎を危うされるやうな貞操が果して國民に價値があるだらうか。和蘭に於ては避妊法の知識が風紀の頽敗を助長したであらうか。同國では婦人は殆んど皆其方法を知つて居る若し知らない者があるならばそれを知る方法が備つてゐる。而して其の結果はどうであるか、互に相愛する若き男女は其給料が二人の生活を支持するに足るならば直ちに結婚するが、子供の養育費が不充分な間は妊娠を控ゐるのである。從つて前にも述べたやうに婚姻數は增加して、結婚年齡は低下したのである。尤も如何なる國に於ても婚姻外の男女關係の絕無なことはない。だが其の數を擧げることは困難

である。從つて往々私生兒の數で之を推算されるのであるが、斯かる方法の誤れることは言ふまでもない。併し假りに此の方法に依りて判斷すれば和蘭は男女道德の最高に達した國だと云へる、最近の統計に依れば出生千に對して私生兒の數は僅かに一九、一である之を他の歐羅巴諸國に比ぶれば非常に低率と云はねばならぬ。英國は同年の統計で私生兒の率は四三、四、スコットランドは八七、九、ベルギは八四、一である。而してにオランダに於て出生百に對し私生兒が二弱を示してゐるのは常に舊教徒に屬する人である。

けれどオランダに於ける私生兒の數の尠いのは道德の標準が高いからではなくて、避妊法の行はれる結果だと云ふ人がある。それは或は眞實かも知れないが、果して之を斷言し得る人があるだらうか。

尤も避妊法が私生兒の數を減小せしむる最大原因だとしても、他國は何故オランダの例に倣はないのであらうか斯かる不幸兒の懷胎を豫防し得る方法の存ずることは寧ろ喜ぶべきことではあるまいか。私生兒の產れない事は社會には大なる利益であるばかりでなく歡迎されない子供を地上に送らないことは未來の母親にも幸福なことである

けれども多數の人々は斯んな子供の出產は母の非社會的行爲に對する刑罰だとの意を有してゐる。が、併し此の主張は此の刑罰が第一に罪のない子供に加へられ、社會もまた之が爲めに損害を蒙むることを忘れられてゐるのである。

之を要するにオランダに於ける風紀及衞生の狀態を正しく觀察するならばオランダは世界に於ける衞生狀態の最も良好なる國の一つで、且つ、道德標準の高いことを是認するであらう。

（オランダ人ドクトル、ヤコブ女史の第六回國際產兒制限大會に於ける演說の梗概）

乳幼兒の死亡は家庭の貧富に深い關係がある

わが國は子供の生れる事が多い點でも世界一であるが、乳兒幼兒の死ぬ數が多い點でも又世界一、これでは大變と云ふので先頃、その豫防策として小兒保健所を建てることに決まつたといふことは前號で書いておいた。さて子供が死ぬに就いては、色々の直接間接の原因があるは勿論であるが、その家庭の貧富如何にも探い關係があるのである。こゝに東京市に於ける調査をかりて、統計に依つてその事實を明かにしたいと思ふのであるが、實に次のやうである。

小石川、下谷、本所の三區にて
被調査死亡乳兒數二三〇五人の內
月收六〇——九〇階級——六九一人
九〇——一二〇階級——三七八人
一二〇——一五〇階級——一九七人

即ち所得の多くなるのに從つて　兒の死亡數は次第に減つてゐる。

〃住宅の部屋數や庭の坪數が多くなるに從つて死亡乳兒の數が減つてゆく事又つぎの統計のごとくである。

死亡乳兒數六一四名の中

小石川區

一室のもの…　九四名　一…三坪…九八名
二室のもの…二〇〇名　三…五坪…三四名
三室のもの…一三五名　五…一〇坪…三〇名
四室のもの…　九六名
五室のもの…　七〇名

本所〇死亡乳兒數八九六名の中

一室…四一三名　一――三坪…一〇名
二室…二四九名　三――五坪…　四名
三室……六五名　五――一〇坪…三名
四室……一〇名
五室…　三名

我が國に於ける信頼すべき產兒調節相談所

東京淺草區駒形河岸平民病院分院内　中央產兒調節相談所

東京市外淀橋柏木　小川隆四郎

大阪市此花區西九條濱通九〇　大阪產兒制限研究會

神戸市塚本通り一丁目　神戸產兒制限研究會

雨のひと日

小林富美子

雨の日はひとりもだせるわが部屋のつめたきいろに心しまりぬ

雨ふれば蕾はとけてほの〴〵とあからみ美しき百日紅の花

夕やけに樹々みな映ゐて上枝下枝たまれるつゆのすがしき光り

夕やけによろこび出づる童らの足みな赤し恒間より見ゆ

目にちかく廊下は赤しつや〳〵こてすりのかげに消えゆく夕やけ

たかふりしこゝろすべなく野を行けば野を吹く風のさびしくありけり

靑桐の廣葉のゆれの音さやにはつなつの風わが頰をなづ

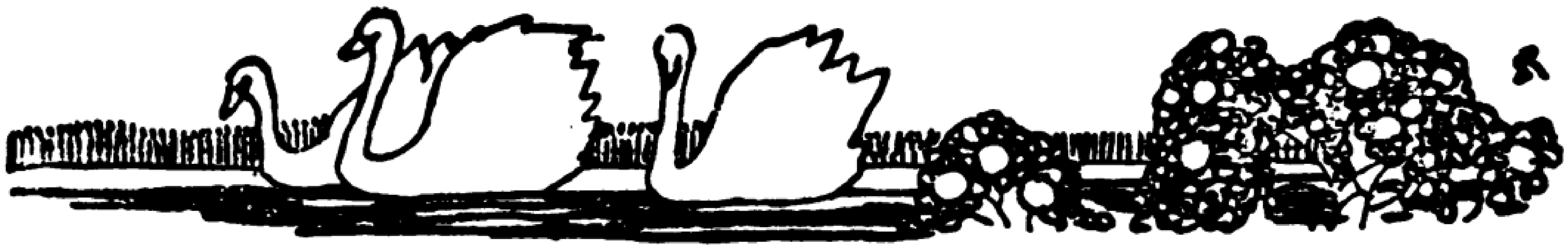
なまなかに人をたよらず現身にわれといふものゝ尊きものを

むちうちて心惜みしたまゆらにまさしく吾れのいのちかなしも

いつの日に蚊遣りしものかよみ出でし本の頁に蚊は死にて居り

ふみよみつかたへにねむる吾子みればまる〴〵しほゝにまつげふかしも

日ねもすの晝のあそびにつかれけむもろ手ひろげてねむれる吾子の



生活斷片

中河幹子

仕事をへてかたづけをれば靜か夜の雨戸をうちて雨ふりいでぬ

縫ひをへて今はいねんとかたづくる閨の戸うちてふりくる時雨

夕さればわが胸を戀ひはしけやし泣く汝が故に生きんと思ふ

朝まだき乗り疲れたる汽車を下りて吹きぶりの俥やとひたりけり

梘をうつ雨風の音はしけければ膝の子にわがものを云ひ居り

梘をうつはげしき雨にはしけやし吾子はめざめてもの云はず居り

露次ふかくもの賣は來ずはるかより聲して通る晝あつきかも

守をつけて兒を出したれど心もとな巷は車馬のゆききしげきに

当面の人

廢娼運動の急先鋒

久布白落實女史を訪ふ

公娼廢止の運動をおこしてから久しいものになりますが、愈々機運が熟して來たと思ひます。此の好機をはづさず、徹底的に公娼の全廢を期したいと思ひまして、今度廓淸會と婦人矯風會とが先づ聯合しまして、向ふ三ヶ年連續して、中央の運動即ち官廳に對して制度の徹廢を建言すること、及び中央の輿論を喚起する事、次に、各府縣に對して稱別に廢娼の實を擧ぐること及議會運動の三つに分つて運動をはじめることになりました。何分にも資金を澤山要する運動ですので、同志及び一般の寄附を俟つこととし、五萬圓を計上してゐますが、これ位では到底足りる譯はありませんが、一番大切な時に使ふ拾圓は、他の時の百圓にまさることがありますから、僅の資金で、出來る限りに於て最も大きな仕事をしたいと思ひます。

全國の娼妓の數は五萬二千餘といふことになつてゐます、しかし永く續けるものは尠く、年に七八千づゝ位は廢業してゐます。後から〳〵と新しく賣られて來るのです。ですから法令で新規に登錄するのを許さないことになれば、當然公娼制度が廢止される事になります。もし新規登錄が禁止さるればあとは五年と見てゐますが、實際營業主も立ちゆかなくなりませうし、三年位で亡びてしまふのではないでせうか。

此の頃、娼妓の制度や待遇が改善されるかのやうに見ゐますが、むしろ私共の意見としては改善されたら廢娼運動は失敗だと思ひます。二度の御飯が三度もらへるやうになり、勤めがらくになつて、娼妓自身にも、世間の人々にも、娼妓といふものが、他の仕事とかはりのない一種の「職業であると思はれるやうになつたら、遂に救はれないと思ひます。私共は全廢といふことに目標をおくべきで絕對に改善などゝいふ事に止つてはなりません。尤も全廢の前提としての待遇改善はこの限りでありませんが。

ともあれ、公娼などゝいふものを存置しておくのは、婦人ばかりでなく男子にとつても恥辱ではないでせうか。

意見を同じうしてゐられる方々の御贊同を願ふわけでございます。

× × ×

朝鮮を思ふ

去年の今頃私は朝鮮にゐた。

あの頃の日にも耳にも珍しいことのみ多かつた朝鮮の生活が私には深い印象を殘してゐる。再び夏を迎へて、今さらにあのなつかしい朝鮮のことが、あれやこれやと繰返し〳〵思ひ浮べられるのである。

殊に朝鮮の同志らの、私の心に與へてくれた感銘は實に大きく深いものであつた。

× ×

京城驛のプラットホームに澤山の同志に見送られつゝ、感銘殊に深かつた別れをして歸つて來てこのかた、お互ひに便りを聞かず、又便りをしないまゝに夢のやうな一年を過つてしまつた、けれど、然しみんな、あの頃と同じやうに沈着に鬪ひつゝ而もくすぶりかへつた炎を胸の奥底で人知れず燃やしてゐる事であらうと、遙かになつかしみ思ふ。みんな健在であろうか。

その後、つぎ〳〵に起つた朝鮮に於ける大小の事件に就いて新聞報導を手にする毎に、私はいつも、思ひ起こす誰れ彼れの顏や聲の一つ一つの上に、身を引締められるやうな聯想をつないでは心を痛くしてゐたが。

× ×

朝鮮に於ける社會運動は、みな、文字通りにいのち懸けの運動である!!

歡迎會の夕べ、十里、三十里五十里の遠い處からもはる〴〵と來て吳れられたといふ百幾十人の同志と共に私は、生れて初めと云つていゝ、感慨深い晩餐をとつた。遠來の私たちの勞をねぎらふといふので、交る〴〵と朝鮮古有の唄を聞かせたり、踊つたり、(朝鮮民族は音樂に於て稀な天分を惠まれてゐるといふ事を私はかれて聞いてゐる)哀しく、暗く、もの憂く、寂しく、腸を引しぼられるやうなあのリズミカルなうたを聞き乍ら、私は眞實に淚を流して哀しんだ。

× ×

思ひ出多い淸涼里の夕景色と共に思ひ起す許さん、鄭さん、金さん、顏さん、等の婦人たちも達者でゐられるか。あれからまもなく、朝鮮に於ける最初の斷髪婦人として新しい斷髪姿が新聞に出てゐたのをみたきり、お互ひに消息を斷つてゐるけれど、松の根本に腰かけて車座になつて六人で云ひ換はした誓ひは忘れられやうもないのである

私は日本に於て、澤山の婦人運動家を知つてゐる。共に解放運動に力を協せてゐる婦人だつて決して少くはないのであるが朝鮮に於けるあの婦人たちのやうに燃えて、あのやうに眞劍にいのちを懸けて鬪つてゐる婦人が何人あらう乎。

× ×

私たちが步いてゐたとき、××銀行の前に夕涼みをしてゐた勞働者風の一朝鮮人の老爺が、つか〳〵と近よつて來て私にたど〳〵しい日本語で挨拶をするのだ「あなたが新聞でみた奥さんでありませんか、遠い處を、この暑いのによく來て吳れました、ありがたう」と。電車の中で上品な朝鮮夫人が私に話しかけた「あなたは奥さん――どうぞ私たちのために、私たちに代つて鬪つて下さい」

或る日晝飯を喫した店へ私は忘れ物をして來た。取りにやつた使ひが一通の書面を持つて來たのである。……私はパンのために雇はれてゐる身體故、今夜のお話を聞きにゆく自由を持たない事が情ない。然し、せめて今、あなた方の姿を見、聲を聞いた事をどんなに喜んでゐるかどうぞしつかり鬪つてほしい……と云ふのである。

燒き付くやうな夏よ。

私は汝と共に朝鮮を思ふ。

我が國婦人運動の收穫と

――今後の活動方面に就て

梅山一郎

我が國婦人運動の收穫の回顧

婦人運動に注意を拂ふてる人は誰でも一大正十五年の上半期程婦人運動の寂しい季節はなかつた。もう行き詰つたのか一と疑問を抱いた。少なくとも今年の婦人界日誌を書く人にはさう感ずるだらう。然し之を以て、婦人運動の衰微行き詰りと感ずるのは早計ではあるまいか。

寧ろ私は明治二十年來、幾多の先輩が時の輿論に嘲笑されながら叫んで來た女權擴張、婦人解放、婦人尊重の要求に對して、第一期の實りの秋が來たやうに思ふ。思へば何といふ長い間の犧牲であつたらう。過去四十年間女性解放の半世紀が得た收獲を今日漸やく見ることが出來るのだ。今日の婦人の今日の考へでは、これ等の收獲は子供だましに過ぎぬだらうが、夜會昔に結つた明治二十年代の日本婦人の眼で今日の婦人の惠まれた樣子を見たら、きつと羨望そのものであらう。

今婦人運動の收獲を回顧して見るのに、明文上の法律改正の多寡は別として、明治四十年代の婦人の嘲笑時代から、今日の尊重時代に至る間には非常た進歩がある。この氣分が彌漫したこ云ふことは形の上の婦選の通過や帝大の入學許可よりも實は大切であり。實質上の收獲である。この婦人尊重の精神こそは、第一期のみのりの秋での、一番大きな收穫ではあるまいか、未だ男尊女卑の傳統こ習慣は消え失せないにせよ、萬人の心の内にこの精神が宿つた以上、男女間の不合理がそのまゝで置かれる筈はない。

見よ、最も時代的に保守的な政府までが、最近その行政の上に婦人尊重の精神を現はして來たではないか。治警を撤廢して婦人に政談演說を聞かせる自由を與へ、女敎員女工の產前產後の休養日數を定めたが如きは、ほんの序幕で、婦人職業の開放廢娼問題に對する積極的態度男子の姦通罪を聞する新判例、國家的經濟の困難を切拔ける爲めに婦人團體へ援助を要求して來た事

青年會の發達とちんばにならぬやう女子靑年會を引き擧げやうとする努力、女子の專門學校の設置比較的有利な女工保護の工場法、非常に多額の豫算がいるに拘はらず、決行せんと準備しつゝある母子扶助法案の制定等、何れも政府が手をつけて將に解決せんとしてゐるものである。實に是等のものは婦人運動の第一期の收穫として、女性達が刈りとる喜びを擔ふものである。過去約半世紀の間に浮沈した幾多の先覺者奮闘者の播いた種子と思へば、收穫は少なくても感謝すべきである。法律を定める役人達は、婦人尊重の精神を授けられて今こゝに代つて、實現の役目を果すに過ぎないのである。とりわけ日本の女性の男女道德向上の大妨害である公娼が、こゝ數年ならずして日本の地上より失はせしむるであらうが如き狀態にまで進んで來たのは、何と云ふ痛快な收穫であらう。

婦人團體は現在惱んでゐる

私が第一期の收穫を弄へ立てゝ喜んでゐるのを見て不甲斐なく思ふ方もあらう。確かに如上の事實が、運よく悉く通過しても今日の婦人にはさしたる喜びを買ふには足るまい。只歷史を見る目が（過去の婦人運動は徒勞ではなかつた、これだけのみのりがあつたのだ）と云ふことを認めた意味で回顧してもらひ度い。今日の婦人團體は、今後の問題解決の爲に鬪ふのであるからこんなことで滿足する筈はない。

所が、昨年から今年にかけて、どの婦人團體も一樣に惱みつゞけてゐるのは何うした事だらう。中にも婦選運動の如き、少數の運動者が笛ふけども、一向に一般婦人はふり向かうともせない。一人一人の意見を聞いて見ると（婦人參政權には贊成だが、今運動をしてゐる人達か氣に喰はぬ」と云ふ。最近擡頭して來た婦人職業問題婦人勞働問題にせよ、調査研究の好奇心にかられて活動するまでの婦人は幾人もあるが、一つの小ぼけの婦人の組合の設置の矢面に立てるだけの献身的な勇敢婦人はないさればこの方面は研究時代で運動に入つて居ない。職業婦人の團體にせよ、東京は一つ殘らず沒落して仕舞うた。未だどの方向へ焦點を落してよいか、判然しない內につぶれる。僅かに氣焰が聞けるのは全國小學校敎員會だけである。

婦人が參政權を得たら當然對象となる可き子供の問題の如き、今の婦人團體では少年保護婦人協會と櫻楓會だけで他は（子供ば抱きあきました…）と云つた調子である。櫻楓會が婦人問題の焦點をこゝに落さうと努力してゐるやうであるが、孤立で反響が少ない。佛敎の婦人團體が、新らしく活氣づかうとしてゐるが、人物が少ないのと佛敎の因習を破ることに、男子の因習を破ると同じ位の努力が入りそうでなか〳〵涉が行かない。地理的に日本の婦人を結ばうと云ふ豫想の下に進んでゐる關西聯合婦人會も、朝日新聞がなければあんよも出來ず、震災と共に生ま

れた東京聯合婦人會は、その點では强味があるが、その後栓をぬいたビールの如く氣ぬけがして、誕生一二年當時の元氣はない。先づこの分では全國都市婦人の代表婦人大會の望みは夢であらう。折からお隣りの支那婦人が、今秋上海で全國婦人代表者大會を開くと聞いては一層悲感させられる。

全國的團體たらうと希圖して成功した婦人矯風會、基督教女子青年會、愛國婦人會及、小學校女教員會は別として、今度文部省が眠れる處女會中央部を眼ざまさせて補助金を出して日本女子青年會の面目一新の計畫を立てたといふが、近頃愉快の一つだ。然しその訓練にどんな目標を置くか、矢張りそこに多少の疑問があり、且つ婦人の指導者に就て何の目算も立つてゐない所を見ると、婦人自らやる婦人團體なるや何うやも疑はしい。

其の他思想から云へば、左傾右傾その内に細かな相違があつて、ごれをごう取つて進んでよいか、本人には判つてゐても團體を率ひる場合になると自信がないのが多い。獨り宗教派の婦人が人道主義をふりかざして進む態度には少しの躊躇も遠慮もなく、随つて比較的に確固たる運動を續けてゐるが、全體から見ると反響のないこと、財政の苦しみこの先何うなるのかと云つた惱みを續けてゐる。

○今○後○の○活○動○方○面○に○つ○い○て

この不統一混亂、そして無力な婦人團體に今後の日本婦人の向上を托するは、心細いと或る人は云ふか知れないが、之を悉く一度に變更することが出來ない限り、現在の團體に望みをかけつゝ、除々に改造の機運を促すより外にない。

私は先づ、日本の婦人運動が大正十五年を境にして方向轉換をする必要を認める。第一は、直譯的の婦人問題の解釋運動の方法を全部捨てる事だ。アメリカで細君の俸給問題が起つたからとて、考へられもしない事情の日本に當てはめるやうな事は一切やめる事だ。一事が萬事、これがため理論上反對はなし得ないに拘はらず、參政運動に對して一般婦人は共鳴しない。婦人勞働運動の如き、外國に御手本が多いだけに一層眞似することゝ思はれるが、唯形式上の模倣はその時限りで、は論はつなぎ得ないのであるまいか。況んや、婦人論を書物で讀んで、それを運動に移さんとする如きおろかな婦人があるとしたらば、今日限りやめて貰ひ度い。最近國際聯盟で婦人部の設置を希望してゐるが、其態度が（諸外國婦人の狀態（長短）を知り、日本婦人の傳統的價値を見出して、一面彼の長をとり、他面こちらの長を外國の婦人に誇るやうな意氣み起すものが欲しいと云ふのを聞いて、私はある暗示を得た。生活上の活動力、そして社會生活に於ける道德の發達は西洋婦人に學ばなければならぬとしても、家庭に於ける西洋婦人の一切を眞似すべきや否やは

大いに疑問だ。外國のいゝものを摑まず、悪い外形ばかり眞似て日本のいゝものを捨てゝ仕舞ふ婦人そんな氣分を增長させる婦人運動があるとしたならば、大正十五年を期して過去に走れよと私は云ひ度い。

婦人運動の順序としては、何と云つても婦人の愛の向ふ所は、より多く惱める婦人を、先づ水平まで引き擧げる運動を先にせねばならぬ。娼妓の解放、女工の保護、農村婦人の向上、無產婦人の教育、有職婦人及寡婦の子供の保護等は何よりさきに手をつけてゆかねばならぬものであらう。今や、廢娼の日近づき、農村婦人問題の芽が吹いて來たのは、日本の婦人運動も愈々第二期に入つた事を告げるものだと思ふ。先輩婦人は婦人尊重の聲を撤底せしめる爲に約半世紀を費した。これら水平線以下の婦人を幸福にする爲には今後どの位の年月がかゝるであらうか。

婦人運動第二期の目標は婦人間の水平運動だと、私は云ひ度い、この間に多年の希望である帝大の入學許可や、婦人の官吏登用や婦人参政權の三大問題が解決すれば結構だが、参政權を通してから何もかもやらうと云ふ態度は何うかと思ふ。（八月二十三日記）

御油にゐて

奥むめお

中部農民組合主催の夏季大學に招かれて豊橋に來たのが十日、靜岡だけ主催者側の都合で急にとりやめになつたものですから、岐阜、名古屋の三ケ所で農民組合の人を中心にした集りで婦人問題に關する話をしました。

今ちやうど、その用務をすまして御油の海岸の宿へ歸りついた處です。お池の鯉にうまうまをやつたり、海に遊んだり、近くのお宮さんへ蟬をとりに行つたりしてルス中温順しく遊んでゐた子供たちが、私をとりまいて、ルス中の珍しい出來事をつぎ〳〵に口早やに云つて聞かせるのですが、口があれもこれもと話して聞かせたい自分の心に伴つてくれないのでもどかしうてたまらぬと云つた風で、三つになる紀伊も七つになる杏一もしどろもどろになつてゐるのが私を吹き出させてしまいました。

「このお宿は動物園みたい」に、鷄もゐるし、鴨もゐるし、家鴨もゐるし、鶉も鳩もゐる、兎さんも澤山の子供と一緒に賑やかな住ゐをしてゐるし、こけつこうは一日に五つも六つも卵を生みます。裏のお庭に出ると、「八百屋さんにあるものはみんな木に生つてゐる」ゆたかな畑もあります。

どうせ四五日がゝりでゆくのだから

どこか海近くにいゝ宿でも見つけて子供たちを喜ばせてやりたいと思つて家を締め切つてみんなで出て來たのでしたが、こんなにいゝ宿が私たちのために待つてゐてくれやうとは、實は思ひがけぬ喜びでありました。

今年は何處もかしこも同じやうに格別の暑さだと見えて、話をしてゐても聽講の人たちの白扇のひらめきと白い着物に照りかへす強い〳〵陽ざしを見てゐると、ぐら〳〵と目がくらみさうになるのでした。

「何しろ暑いので、話をする人も中々大變だけれど、聽いてゐる方だつて決してらくぢやないですよ。この暑いのに、あゝぎつしりつめ込んで座つてゐては殊に……然しみんな熱心ですね」

「今、ちやうど田の草とりで忙しい最中なんですが、日中田圃にしやがんで草をとつてゐるのに比べたら、まあ、遊んでゐるやうなものです」

幹部の人は、陽に、やけた顏の汗をふき〳〵こんな事を云つてゐられました。

それにこの地方では、養蠶を盛んにやつて居るので、そのためにも今は格別のいそがしさなんださうですのに、

あゝ澤山の人が――それも十里二十里の遠い道を自轉車で通つてゐる人も少くないとの事でした。――五日間續けて、朝から夕方まで熱心な聽講をつゞけてゐるのです。私はすつかり感激してしまひました。

主催者側の云ひ分を聞くと、丁度折惡しく農民として忙しい最中に向つたので、集りが少なかつた。それに、組合員はみんな郡部に住んでゐるのに、いろ〳〵の都合で都會地で開くことにしたものだから、これも集りを惡くした大きな原因だつたさうです。けれどどうして〳〵都會地などでよく見かけるやうな涼みがてらのひやかし聽講なんて格好の人は一人もなく、みんな一生懸命の熱心な樣で、而もこれが百姓としては一番忙しい時期であるのを差おいて來てゐられるのだと云ふのですから、如何にも「おれ達の組合の夏季大學だ」つていふ風な、熱心な意氣込みが見えて、組合としての力強さがあり〳〵と私に感じられるのでした。

名古屋では割合にゆつくりした時間がとれたので、ここの組合長である中澤辨次郎氏からいろ〳〵と農民運動に就いての暗示の深いお話を聞くことが出來ました。

中部農民組合の本部のある岐阜地方は、全國で最も早くから小作爭議のあつたところですが、今は下火になつて新潟、山形、秋田、等が、現在では一番火花を散らして鬪つてゐる。これに就て一つの面白い現象は小作爭議のやかましい土地から、一番多く近頃問題となつてゐる娼妓を出してゐることで、以前には岐阜あたりから隨分澤山の娼妓を出してゐたものだが、今では秋田、山形、新潟あたりの美人が、一番餘計娼妓になつてゐるやうだ。それは、小

作人がやつてゆけなくなつて、まづその娘を賣る、娘を賣つてもどうしてもやつて行けなくなつて、とう〳〵爭議が起つて來るこいふ順序にしらず〳〵の内になつて來てゐるらしいのである今では、岐阜なんかでは、娘を賣らうなんて云ふ人は一人もない。工場の女工なんかも、調べてみたら、かういふ關係が或ひは付まとつてゐるかも知れない…………

中澤氏は更に、農村の婦人の解放は何とかして、農村婦人をあの過重な勞役から救つてやつた上でなくては、何を云つたつてだめだ。今日の百姓の女は實にひどい勞働に服してゐるのですからね、といふ事もくり返してゐられました。

まことに大正十五年の今日、農村の婦人ばかりに限らぬ、全ての無産階級の婦人の手から、もう少し家庭内の雜役を省く工夫が出來さうなものです。

すでに金持の、有閑階級では人手もなく忙しい我等の家庭にこそ使つてひまを生み出したいとうらやまれるやうな、いろ〳〵な文明の利器を使つて、結構な生活をしてゐるのですもの、

「それから、餘計な子供を生まないやうにね」と私は、あとから中澤氏の言葉に次ぎ足しせずにはゐられませんでした。

農民運動には、殊に產兒制限の宣傳が必要なのではないでせうか。

●便所で居眠る●

丸の内の廿一號館に友人をたづねての歸るさ、二階の便所に用たしに入つたところ、女事務員が三人、そこの土間に寄りかゝるやうにしてしやがんで居眠りをしてゐた。

人の氣配にびつくりしたらしく二人だけはすぐに目を開けて私の方を見上げたが、でもあわてゝ立上がるでもなく、いかにもだるさうにぼんやりと目を見ひらいてゐるだけで、あとの一人は、何にも知らないで眠りこけてゐる

さすがに私は驚いた。普通に、ビルデングにゆくと若い女の人たちが、洗面所――便所のわきで競うて紙おしろいをすりつけてゐたり、頰紅をさしてゐたり、髮のなでつけ合ひをしてゐたりしてゐて、飛入りの外來者には手を洗ふすきもない程であるのが多いのであるけれど、そしていつも、この樣子をみてうら悲しい氣持ちになるのが常であるけれど、今日は何しろおどろいた――ほんこにびつくりした。

「だるいんでせうね。のび〳〵こ大びらに休んだり遊んだり出來るやうなクラブか何かゞほんとに欲しいものですね、あなたの事務めさきのすぐ近くにほんとに何かいゝ休養場がほしいものですね」と私はつく〴〵心の中でさう話しかけてゐたのだけれど、但うつかり飛び入り者の私が話しかけたなら彼女たちは蜘蛛の巢を散らしたやうに四散するにちがひないことを知つてゐたから――

（やま子）

豊橋に新らしい婦人會

大正十一年に初めて豊橋に政談演說會に招かれて行つてからのち、三度も重ねてゆくことになりました。隨分私にとつて緣の深い土地であるわけであります。ところがこゝには、組合もない、思想團體もない、婦人會もない、と云つた調子で、全く時代思潮の大波もこゝだけはす通りして流れてゐるのかと疑はれる位でありました。

然し六月初めの演說會のとき一千超て集つた會衆の內に三百名程の婦人を數へる事が出來た私たちは、こんなに進取的な土地にどうして婦人團體が出來ないでゐたのであらうと、不思議がりました。

私たちも大分方々へ出かけて步きましたが、三百名以上もの女の人が誰に强ひられるわけでもなしに演說會に出かけてゆくといふ事は、ちよつと珍らしい方のことですから、まして、さう大都會でもない。土地であれば一層。たとへ、聞きにゆくと云ふより、見にゆかうと云ふ心の方が多分に動いた人も少くなかつたにしても、とにかくあれだけ多數の婦人が會場へ出かけてゆくだけの自由を持つてゐたと云ふこと、そのことが、そして、出かけて行つた以上は、あとで何か自分の生活について考へてみるに違ひないのですから――私たちは非常に喜んだのです。

まもなくこの豊橋にも新らしく婦人會が出來さうだといふ便りを受取りました。そして、先きに立つて、ほんさうをしてゐる人が皆、眞劍な、生活に强く生きてゐられる人ばかりだといふ報らせに接しました。「むめおさんあなたの飛上がるほど喜びさうな便りが來ましたよ」と、かう云つて、豊橋からの書面が來る每に、社內では、私をひやかす程にさへなつたのでした。丁度八月號の卷頭で、私は地方の婦人會に就いて書いておきました。みんな私のあの一文に非常に共鳴をして豊橋の婦人會をして、よく時代に適應した新しい內容を盛つた婦人會に育てあげやうと意氣込んでゐられるといふ事は、何より私を喜ばせました。

私は折惡しく時間の繰合せがつかなかつた爲めに、この婦人會の人達が集つて私を待つてゐて下さつたといふ日に行く事が出來なかつたのですが、その內の二三人に會つていろ〳〵話をして歸りました。鈴木千代子さんは、「今までの婦人會にあり勝ちだつたやうなひま潰しの、着物の競爭ばかりやつてゐるやうな、社交會にはなりつこがないのですよ、みんなしつかりした眞面目な人ばかりが、先きに立つて熱心にやつてゐるのですから」と、くりかへして話されました。見たゞけでもう信賴の出來さうに元氣な、てきぱきした鈴木さんが自信ありげにかう仰言るのですから私は安心しました。

今や、社會は積極的な婦人のはたらきを痛切に求めてゐます。時代に目ざめた新しい婦人たちに依つて、新しい

實のある活動をする婦人會が各地に生れなくてはならない時です。幾萬の豊橋の一般婦人の爲めにいゝ刺戟となり力となるやうに私はこの會が健實な歩みを一歩又一歩と進めてゆくことを成長を念じつゝ筆を擱きます。

先日は雜誌「婦人運動」ありがたうございました。

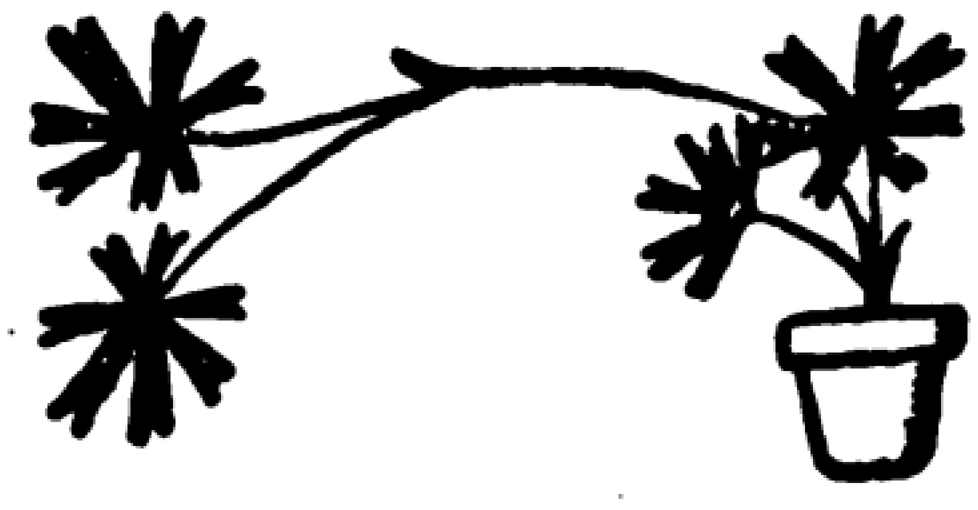
豊橋へ御講演に御越し遊ばしたことも新聞紙上で承知して居りますが、七月下旬から暑氣當りの爲め臥床いたしましたのでつい心ならずも御禮もおそくなり、一度御眼もじ申しあげていろ〳〵御教へ頂き度存じながら、失禮致しまして申し譯もございませぬ。漸く仕事が出來るまでに恢復致しましたから、乍他事御休心遊ばして頂きたう存じます。

その後御懇意の奥樣方と御話も出來て居りますから、あなた樣の御都合御叶ひ遊ばす折には親しく拜顔の榮をうることが叶ふであらうと、唯今から、それを何よりのよろこびとして居ります。

私も、今相當の年齢を重ねまして考へねばならない迷路に立たされて居ります。不治と宣告された病ひが恢復いたしまして、少しは仕事も出來るまでにはなれたのでございますが、何分にも「何ケ年かの春秋を無爲に過してまゐりました今日、少し考へることがございまして兩三年來處女會に働かせて頂いて居りますが、父といふ後楯のございます私ではございますがそれでもいろ〳〵考へさせられることがございます。狹い世相、それも新化したと云はれる此の頃それですら私には胸痛く思はれるのでございますもの過古十數年間にわたるあなた樣の御苦勞さぞやと御しのび申しあげて居ります。それこそ表玄關から福井に入つたわけでしたと御書き遊ばしたあなた樣東華座で、拜し參らせた、御溫容しのびあげ參らするにつけ、なみ〳〵ならぬ御苦勞のおわしますでございませう御こと、そゞろに存しあげて居ります。

夏の國で大患にかゝつて、とう〳〵唯今の身になりました私は、なつは禁物でございますが、涼風とともにまた少しづゝ働かせて頂きますつもり、皆樣の御高庇のもとに拙い身を一歩づゝ歩まして頂きまして生存の意義を完からしめたう存じます。不策者のさぞ、御眼に餘ることでございませうが、唯今の私は家庭には何の用事もございませぬ體、御力によりましてだゆたい勝ちの歩行をふみ固めさせて頂くことが叶ひますれば仕合せの至りに存じます。

御榮え祈り參らせながらおくればせの御禮を　可祝(吉原はつ子)



遠地 おたより 近地

香月せき

ひまわりの喜びさうな暑さがつゞきます。

あつくつても全身にあせの流るゝ樣な強い感じは、私の動きに何かこだまされた樣で、夏でなければ味い知る事の出來ないめぐみこひろもよるも感謝して働いて居ります。

東京はやける樣にあつくて、じしんがあつてたまらぬと愛する弟からのたよりに聞きました。

めぐまれた〔婦人運動〕を讀みますこ、あつさにもまけずじしんにもおびゐないで、やつぱり生き〳〵とした姿でペンをはしらせていらるゝ愛するお姿にせつしまして、嬉しく今さらなつかしく感じました。涙ぐましい喜でした。お別れした折にお約束した支那服も作らないで、おたよりもしないで、やつぱりもぐらもちの樣な生活をしてゐた私をおこらないで、斯くして讀む折をあたへて下さいまして、一文一字に、うもれたさめきつた血をもやさせて下さることに對して感謝せずにゐられません。

お人形は九ケ國の人形が出來ましたお人形の世界が一歩々々廣く成りますたゞごとにかぎりなき希みの喜びに滿たれます。

どんなに淋しい悲しみを感じましても、はづかしい樣な生活苦に出合ひましても、私がお人形を見つめてゐる目から、子供等へのこゝろに美の世界をめぐまれた喜びが、小さな魂に現れて來ます事をはつきりと感ずる事が出來ました。

廣い廣い世界中が、近い近いおとなりであるかの樣に數へてやりたいので御座います。

患難は母とよばるゝ私へのこゝろの試練でありました。でも時の力は一歩々々不安をさらせて、いたづらに流す涙をぬぐつてくれました。

私はお人形の世界のほかに赤い小鳥と黑い小アリの生活を見つめて居ります。それが言葉に成つて、刺繡圖案に成つて、かべかけにもしてながめてゐます。そして詩に作つて見てゐます。それから又近頃、油虫の家族を見つけ出しまして、子供の詩に作つて見ました。作り方はようちであります。けれ共、それは私の希みと感謝を現したのです。だん〳〵とかいておくつてお目にかけますから、詩文のふくざつなところがありましたなれば、お數へ下さいませ。

油虫は、私に人間の世界にはかぎりなき喜びのたゞよひがある事を數へてくれました。

支那のジプシーをたいて下すつた可愛いゝネネちやんはお元氣でゐられますか、モウなんでもお話が出來るでせう。三つに成る私の子供未來生さんも何んでも知りたがつて解ると嬉しがつてお人形と遊んでゐます。

婦人運動の榮へと愛するお姉樣の御健在なる事を祈りつゝペンをおきます。

ことしの春小倉市へゆきましたとき、一人の（支那服のおばさん）と知り合ひになりました。門司から來て下さつたのだと云ふことを後で聞きました。ポツリ／＼とかりそめの一語一句にも精一ぱいのこゝろをこめてでなくてはよう話しも出來ないと云つた風の、女として、非常に異つた感じのする人でした。

大きな不幸を擔つた人ですが、明けても暮れても人形（東洋人形）を作ることを唯一つの樂しみにして、ゐられます。藝術的香りの高い氏のお人形は、曾つて婦人の友誌上で悉しく紹介せられてゐましたが、是非機會を得て、實物を以て廣く世に紹介したいものだと私は思つてゐます。

これはわたくしのお手紙ではありますが、讀後、嬉しさの餘り轉載する事にしました。（おく）

◎

前田としね

農村に住む私たちの忙しい／＼時節か來ました。田の草とりに、蠶の世話に、私たちは眠る時間もうばはれてゐるのです。日中、暑さの眞盛りにうつむいて田の草をとつてゐて、こしをのばして目を上げたとき、ほんとうにぐら／＼つと倒れさうです。

ことしの暑さは、わけて格別だと云ふでありませんか。

こんなに忙しい時には雜誌の一頁をよむ暇だつてありません。忙しい私たちが、仕事のあいま／＼に讀む雜誌としては一番すきな（婦人運動）だつて私には六ケ敷すぎます。

奥さんから、始終をんぶして歩いてゐられた御子さんがやつと背中から下りて身輕るに歩くやうになつたといふをたよりを戴いて何がなしに嬉しうございました。私も毎朝毎夜、三つの女兒を身に縛りつけたまゝで、籠さげて茄子や胡瓜をもぎに行つたり、田の草をとりに行つたり（この時は畦道で泥なぶりをさせて置きます）蠶の桑を刻んだりしてゐます。全く無產階級の私たち家庭婦人には仕事が多すぎます！

あなたの御演說の言葉通り、世は文明を誇る大正も十五年といふのに、この私たちの生活は何とみぢめなことでありませう。

◎

三澤まさ子

毎日のあつさには閉口しますが、このあつさにもめげず、皆樣には相變らず熱心に數多の女性のために御執務下さるのかと思ふとあついなんて云ふの

はぜい澤な事でございます、こんな事でどうする、夏はあついに決つてゐると自分で我が心をむち打ちつゝ、ごぼ〱と婦人問題の一端をば、又社會智識のほんの一部を學ばせて頂いてゐます。

職業婦人同志とは云つても、私共の看護婦仲間には、比較的ブル階級ぶる人が多い傾向でありますので、社會のこと、自分のことに就いて眞劍に考へる人は稀れであります。

近代女性の先驅とならねばならぬのに、餘りに虛榮心が強くて、質實剛健の氣象にとぼしいのには、いつも乍らある淋しさを感じさせられてゐます。一寸外出をするにも、どこの令孃かと思はせる程に着飾つて、そして頭の中と云つたら？實になさけない事でございます。而して尊い一刻々々を浪費するのかと思ふと、實際腹立たしくもなります。

これらの人たちを職業的に、又社會的にめざめさせるのは誰の任でありませう。毎月御社からの〈婦人運動〉にて、いつもこの考へを厚うさせられて居ります。これだけでも自分の目的地へ近づきつゝあることを嬉しく思つてゐます●

時節柄御からだを大切になさつて、吾々女性のために御奮闘をつゞけて下さるやう、北信の地に祈つてゐます。

福田靜枝

婦人運動を毎月拝見さしていたゞいてゐます。あなた方女同志がほんこうに助け合ふ事を望まれる方でありますなら、そして世間ばなれのした詩人や學者ばかりの單な指導者で終る方でないなら、どうぞ私の無知な不平ご不滿に耳をかたむけて下さい。

私は職業婦人を基調にした婦人運動の話は時々耳にしました。

世の中の撰ばれた人達、社會運動者婦人運動者あらゆる天才達、さうした人達の偉い言葉はいろんな雜誌の上で度々目にします。

職業婦人が女と云ふものゝ何割をしめてゐるのか私は知りません。

又あらゆる無產階級運動に類する讀物と無產大衆との間にどれ程の聯絡があるのかも知りません。

私はさめよ立てよとさけんで第一線に立たれる方の勇氣と働きとを驚きの目で見ます。先人達によつてどうやら手をつけられた職業婦人運動と職業婦人達の立場のハッキリしてゐる事を羨やみます。

詩や歌をつくる餘猶も小說を書く才能もなく、先驅者となつて解放運動のさきがけをするだけの働きもなく、職業婦人と云ふハッキリした立場も持たない、家庭內の無報酬勞働婦人のみぢめさを御存知のないあなたではなからうと思ひます。せまい〱家の中で、こなり近所に氣がねしながらうようよと子供を生んで育てゝ行くありきたり

な極く平凡な女心を御存知のない特殊人ではありますまい。朝起きるから夜ねるまで、ボーッとのぼせて暮らしてしまふあわたゞしいまづしいきわみの女の生活、それはどんな所からどうして手をつけたら幾分なりと明るみへ向かはれるものなのでせうか。

亭主の性慾から、となり近所へのつき合ひから、子供のみとりから、食事の世話から、掃除から、せんだくからそれは分かりきつた忙はしいきわみのまづしいきわみの何のたぐひもないあはたゞしい生活です、そしてそして男からは俺はお前を養なつてゐる、飼つてゐると言はれなければなりません。職業を持たうにも持つ餘猶のないみじめさ。

さうした仕事は何にも出來ませんとすまして詩ばかり書いて居られる撰ばれた方でない限り、くだらない事にくだらなく氣をもみながら、昨日も今日もと云ふ具合にたゞさうして日を送らねばなりませもん。ほんとにどうしたらい丶のでせう。是れ生きた現實問題の一つです。さしせまつた足もとの問題の一つです。出來るものなら何とか相談相手になつて下さいませんか。

無知な青物屋の山の神の生活から來る愚痴を取り上げて下さる人だらうかと、そんな事を思ひながらやつとの思ひで是だけ書きました。

何か、女の手で實のある仕事は出來ないものかと、生意氣にいつもそんな事を考へてゐます。

大阪職業婦人聯盟
永田清美

こう〳〵倒れました。七月から氣分が悪いのを無理して諏訪の森（職業婦人聯盟の休養所）にその夜を明かし翌日濱寺の病院に谷口淼枝さんを見舞つたまゝ、發熱四十一度――二日程は夢中でした。國から母が來て一週間餘り入院して、未だ動かしては不可ないと云はれるのを岡山に連れて歸られました。

諏訪の森も、あれだけでしたら可なりの成績だと云つてい丶でせう。初めから大きなものを望んではゐませんから。病氣の苦さよりも、病氣になる迄の苦しさ、それは皆、先覺者たちの說かれた道だと思ふて忍んでゐます。より大きな苦しみは、自分を大きくしてくれます事を思ひます時、苦は去つて樂しみは大きくなります。

此の婦人運動に就て、ときごき先輩がたから『有名な人のものよりは、無名な人の書いたものに隨分しつかりしたいゝものがありますね』と云はれます。

婦人の爲めの稍高級な發表機關しては、全く本誌があるばかりなこのですからもつと〳〵皆さんから、何でも書き送つて貰つて、本誌を通して、今日では、こんなにいゝものを書く人だつてある、こんなにしつかりした生活を打立てゝゐる人だつてゐる、と云つた風にかくれた婦人の世界をぐん〳〵社會に押してゆきたいと思ひます本誌の上に婦人の力を集めよ！



髪（舊作）

伊福部敬子

「まあ、さうだつたの、それはあなたも苦勞をしたわねえ」
彼女の長い愚痴話を聞き終ると、おしなさんはいたはるやうな表情でかう言つた。そして、何かしら母親の膝にすがつてむづかつてゐる子供を抱き上げると、片方の乳をあてがつてやつた。子供は今までの不機嫌をけろりと忘れて舌皷をならした。彼女はその樣子を見て、思はずほゝえんだ。
子供はチウ〳〵と、吸ふ音をさせながら、お餅のやうにふくれた片手で、母親の乳をなでゝゐた。彼女が、此方から目顔で何か話しかけるとバタ〳〵足をうごかしてそれに答へた。彼女はそれを見てゐると飽きなかつた。
「それで、あなた、これからどうするつもりなの？」
おしなさんが促した。

「どうつて、私、まだ考へてないの、考へやうたつて考へられないのよ、あんまり大きな重荷を不意にとられたので腰がすはらないつていふ恰好なの」

「全くねえ」

不意に椽にさしてゐた陽影がうすれたと思ふと、さつと來た風が、細くなつて彼女の胸の邊りをかすめた。「おゝ寒」彼女は思はず肩をちゞめた。そしてそのあとで辯解した。

「病氣してから外へ出るのは今日がはじめてなの、だから一寸しても寒いんだわ」

おしなさんは立つていつて、彼女の後から、だまつて羽織をかけてくれた。

「私ねえ、こんな大きな荷を、不幸をどうしてせ負つて歩けるだらうとばかり思つてゐたのよ、あの子が生れるまでも、何とかして母にならないで濟むものならとばかり希つてゐたんですよ、そして、偶然に、私の希ひ通りになつたのよ、だけどかうなつてみると、私はじめて、あの重荷が私のためにどんなに必要なものだつたか、あの荷が私のツヽカイ棒になつてゐたかゞわかつたのよ、淋しくつて頼りなくつて、生きてる空もしないのよ、此の頃は」

「それはさうでせうつて」

彼女の唇にふれる空氣が、水のやうに感じられた。

彼女は、おしなさんの膝で、いつの間にか眠つてしまつた子供の顔をながめてゐた。そつとその手にさはつてみた。肉ははち切れさうで、あつたかゝつた。彼女は驚いた。

「寢かせませう、やつとこれでこつちの體になつたわ、あなた、一寸そのふとんを敷いて下さいな」

彼女は言はれた通り、窓の下にたゝんで重ねてあつた紅い小さい敷ぶとんをひろげた。甘ずつぱい乳呑兒の匂ひがたゞよつた。

「まあ、かはいゝおふさん、一人でこれにねんねするの？」

彼女の胸に、新たな悲しみがおしよせた。彼女は、顔もよく見ないまゝに死んで行つた子供のことを考へた。暖いふとんに一度も寢かせられなかつた、胎の中にゐた間中もその母から呪ひとほされた、そして、生れては又母の不幸と悲しみを小さい一身にせ負つて死んで行つた子供のことを、彼女は考へた。

「ごめんなさい、私つい又子供のことを考へたものだから」

そして彼女は、冷たい指先で眼頭を押へた。

「お察ししますよ、私だつて此の子が亡くなつたら、それこそ生きてる氣もしないだらうと思つて、」

おしなさんは、とん／＼と、蒲團の上からたゝいてゐた手をやめて、かはゆくてならないものゝやうに、頬をすりよせた。そのおしなさんの顔は、まるで前とはちがつてゐた、健全な、そして智慧の深い母の顔であつた。

「佐和ちやん、少しの間ねんねしていらつしやい、小母さんがこゝにいらして下さるからね」

そしておしなさんは立上ると、ひろがつた胸元をかきあはせながら、「ほら、ごらんなさい、一んちこんな風をしてゐるの、髮も結へないことが度々あるのよ」

彼女は片頬で笑つてそれに答へた。

「あなたもずいぶんお變りなすつたわねえ」

つく／＼と、彼女は、彼女の前にきちんと膝をそろへて坐つたおしなさんの樣子をみた。顔には、まるで白粉氣がなくなつた代りには、體の中から、心の核からしみ出て來るかと思はれる生々したものがあふれてゐた。一筋も亂れぬ銀杏返しばかりを見つけてゐた彼女の目に、その田舍風な束髮がおかしかつた。

「あの、今日はゆつくりとしていつてもいゝのでせう、泊つていつていつても」

「ゑゝ、でも、あなたもお忙しいのに」

「いゝゑ、それに今日はまああの人來ないから、今何か夕飯の仕度をしますからね」

「さう、それはすみませんわね」

彼女は抗はず泊ることにきめた。そしておしなさんが臺所に立つていつたあと、一人椽側にしやがんでゐた。椽から隣家の羽目板までは一間とは離れてゐなかつた。羽目板に近い方の半分程は、陽があたらないのか、青い苔がじめじめと生えてゐた。彼女はしやがんだまゝ、その黝い土をじつとみつめてゐた。すると彼女には、いろいろのことが思ひ出されて來るのであつた。

まるで手垢のついたパラフィンのやうに、透きとほる白さで包まれてゐたあの子、室のすみの座蒲團の上に白い襦袢でくるまつてゐたあの子、

「でも、まあ兩方ともに仕合せでしたわ、女の兒だもの、先々あなたも苦勞、子供さんも苦勞、そしてあの人だつてやつぱり心掛りになつたでせうからね、何にも知らないで亡くなつたんだから、仕合せものですよ」

彼女は、その時小母さんが彼女に言つたのを思ひ出した。

「えゝ、ですから小母さん、私もう何にも考へませんわ、私の苦勞は皆あの子がせ負つていつてくれたんですから」

「さうともね、これで氣を立てなほして一仕事しなけりやうそですよ」

ほんとに、小母さんの言ふ通り、あの子は孝行ものだつたんだ、と彼女はつぶやいた。親の苦勞を知つて、急いで死んでいつたにちがひない、あんなに早く死ぬのならば、せめて胎にゐる間だけでも、やさしい母のやうにしてやればよかつたのに、あんなに目も見ゑないものに、自分の出生を遠慮させたりするなんて、意氣地のないためばつかりだ。意氣地のないといへば、一から十まで意氣地のなさから起つたことじやないだらうか、自分が苦しみ通してゐるのも、あの子のた

つた一秒の、その十分の一にも足りなかつた短かい一生をついに父なし子の名に生きさせたのも、そして又子供の死んだのを却つて歡ばれたりするのも。だけど、こんなに初めつから張り合のない私じやなかつたんだけど………。

「でも、これで私の體も心もかるくなつた、どんな事でも出來る、何だつて出來るやうになつたし、何をしたつてかまはない、どんな勉强だつて出來るんだ、朝江よ、ほんとうに私はお前の心を忘れないで勉强するよ」

彼女は、これまでに幾度となく繰り返したと同じことを、自分の心に言ひきかせるやうに又繰りかへした。けれども、彼女の心は、これまでと同じく、瓦斯の稀薄になつた毬のやうに、少しも彈まなかつた。

「ほんとに、何し冷たい風だらう」

彼女は、そして襟元をかき合はせた。

振り返つてみると、室の中にはいつの間にか電燈がついて、その黄色な光暈の中を蚊が渦まいてゐた。

「あゝ、佐和ちやんに蚊がとまるわ」

彼女はつぶやいて立上ると、「おしなさん、蚊やりどこにあつて？佐和ちやんのとこへ立てゝやらなけりや」と、臺所に向つて呼んでみた。

「あゝ、蚊やり？丁度今きれてるのよ、あの蚊張をね、そこの押入の上の段にあるから吊つてやつて頂戴な」

彼女は蚊張の裾が子供の顏にかゝらないやうに、そーつと持ち上げるやうにして、二隅だけつるした。そして顏を押しあてゝ窺ふと、すや〳〵と心持よさゝうにねてゐた。

「まあ、よくねてるわねえ、あら、汗かいてるわ、暑いのかしら」

彼女は子供のそばに坐つて、しづかに團扇の風を送つてやつた。枕といつしよに投げ出してる手をもち上げてみた。それでも子供はよく眠つてゐた。子供といふものは、起きてゐる時よりも、眠つてゐる時の方がかはいゝと思つた。

「どうも有りがたう、さ、今の中御飯にしませう、又起きると面倒だから」
おしなさんは、蚊帳の外から、子供の寝顔をみながら彼女にいつた。
「何にも手傳はなくてすみませんでしたわね」
「いゝえ、何にもないのよ」
彼女とおしなさんとは、大きなおぜんにほんの少しづゝ並べられた食物をはさみながら話しつゞけた。
「ねゝ、そりや子供つてものはもつて見なけりや味のわからないものよ。私だつて考へたのよ、こんな中に子供なんぞ生れたら、私は仕事なんぞ出來ないんだし、あの人もあゝでせう、敎育だの何だのつては愚かのこと、生きてゆけるかしらつてね、でも、どうにかやつてゆけるものだも、かうして大なり小なり生きていつてごらんなさい、もう十五年たてばあの子も十六だわ、十六になれば女の兒ですもの、何とか相談相手にはなりますからね」
「さうね」と、彼女はうなづいた。
「子供がなかつたからつて、それだけ仕事がよけいに出來たり、お金でもためるなんていふものじやないわ、却つてその反對よ、一寸子供のない女にはわからないだらうと思ふけれど、この着物だの、蒲團だの、皆私が縫つたのよ」
「まあ、あなたが」
「えゝ、やつてみれば又樂しみのあるものね、私これからミシンでも稽古しやうかと思つてるの、どうでせう」
「だつて、そんな暇があるの？佐和ちやんの世話だけで大變じやないの」
「えゝ、だけど何かしらしつかりおぼねておかなけりや、子供のことを考へると、氣が氣じやないんですもの、毎日のことはどうにかおつゝくから、私近頃にはじめやうと思ふの」
「それはよござんすわ、だけど、あなたは子供さんがあつて働き甲斐も辛棒甲斐もあるけれど、私はまるで一人ぼつちな

んですもの」

　不意に涙が咽喉にからみついて來た。

「でも、あなたは若いんですもの、子供の枷がなくたつて働く人ですもの、これまでの苦勞を無駄にしないで、しつかり勉強するのよ、ほんとに、これで勉強しなけりや、うそですよ」

「ねゝ、私もさう思ふのよ、どなたもさう言つて下さるし、私もこれで何でも出來るんだつて、いつも自分に言ひきかしてるんですけれど、駄目なの、どうしても氣がはづまないの」

「そりや、あなた、さう／＼急に飛び立つやうにはゆくものじやないことよ、體だつて、まだもと／＼じやないんだし、それは氣長に芽の出るのを待つてるつもりでなくちや駄目よ」

「でも、私、今考へたの、わかつたのよ、重荷だ／＼と思つてゐたけれど、やつぱりあの子が生きてゝくれた方がよかつたんだつて、」

　目頭をあふれて出る泪を見せないやうに、古今里の湯呑を灯にすかしてみた。

「あなた、お湯には入れない？もういゝんでせう」

「ねゝ」

「じや、もうすぐ佐和ちやんがおきるから、一緒にゆきませう」

　それから暫くして、彼女と子供を抱いたおしなさんとは、湯やの方へ話しながら歩いていつた。

二

「もう寢ませうか」

　一人取り殘されて、何をするともなく、卓子に頰杖をついてゐた體を起すと、薄暗くなつてゐる室の中を眺めまはして

かうつぶやいた。電燈の光のとゞかない室の隅の方には、丈の長い、たぶん誰かの古らしいおちやんちやんが衣紋竹にかゝつてゐた。彼女は寢衣にきかへると、そこに敷いてあつた床の中へもぐるやうにして入つた。九月もすぎないといふ時節なのに、彼女はさつきのお湯の湯ざめがしたのか、指の先はしんこ細工のやうにこち〳〵してゐた。床に入つてからも兩足をすりあはせるやうにしても、少しも溫みが湧かなかつた。そして、何時までたつても、まじまじと眠られなかつた彼女はいく度も寢返りをしては燈に背を向けて見、又明るい方へ向きなほつた。けれども、どうしたわけか、目は冴えるばかりであつた。

彼女の隣りには、おしなさんがすぐ枕を並べてすや〳〵と眠つてゐた。おしなさんの懷へ片手をあづけて、子供は暖かさうにねてゐた。さつき風呂から歸ると、いゝ心持に子供はうと〳〵してしまつてゐた。おしなさんは子供を寢かせつけながら、彼女と話をしてゐたが、それからどうしたの？そして？などゝ質問ばかりしてゐたと思ふと、その中、「私お先へ失禮するわ」といふなり、枕に頭を押しつけて寢入つてしまつたのであつた。

彼女は、體をおこして母子の寢姿をつく〴〵と眺めた。その反りかへつた部厚な唇とひろい額とが、その子供とは腹ちがいの姉にそつくりだつた。そしてそれは、母親であるおしなさんとは、似もつかなかつた。

「まあ、房江さんにそつくりだわ、やつぱり爭はれないものだわねえ」

彼女は寢返りをして、又考へつゞけた。

これまでは、まるで根のないやうなその日暮しをしてゐたおしなさんが、母親になればこんなにしつかりして來るものだらうか、こんな位ひなら、私もあの子が生きてゐてくれゝばよかつた。あたゝかい着物一枚も調へてやれないから、ミルク一杯も與へられないから、そして又自分の一生を子供故にすてゝしまはなくてはならないから、いつそあゝして何にも知らずに死んでいつた方がよかつたのだと、悼みながらも喜んでゐたのだけれども、やつぱりそれは間違ひだつた。

（まあ〳〵却つてこの方があなたのためにもよかつたのよ、ねえ）と、そんな風に言つてくれた人々は、何といふ冷たい恵まれない心の人だらう。

どうして、これだけの收入で立つてゐる暮しか、數字的のことは分らないけれども、たしかに彼女よりも貧しい筈のおしなさんが、かうして立派に子供の親になつてゐる、そして子供故にこそ生き甲斐があると、自分でも言つてゐるではないか、

「さうだ、私の考へ方が間違つてゐたんだ―

「でも、そんな事言つたつて仕方がないんだわ、働かう、これから又働かう」

彼女は、いくら考へてもまとまりのつかない考へを打ち切るやうに、蒲團を引被いで目をとぢた。

そのとたん、わーつと、物に憑れたやうなけたゝましい泣聲がした。ハツと思つて子供の方に向き返つてみると、おしなさんが片手でとん〳〵と、子供の背をたゝいてゐた。ぶつ〳〵と口の中で何か言つてゐるけれども、まだ夢の中らしい子供はやつぱり目をふさいだまゝ、手と口とを夢中になつてうごかしてゐる。乳を探すのだらう「おつぱい、おつぱい、さ、おあがり」まだ判然とはさめぬらしいおしなさんが、乳をあてがひながら、とん〳〵とたゝいてやつてゐる。

「何時でもそんな風に夜泣き出すの？」

彼女は母子の樣子を、珍らしいもののやうに眺めてゐた。

「えゝ、大低一度づゝは、お腹が空いて目をさますのよ、だけど今のはきつと夢をみたんだわ、あんな泣き方つてないんですもの」

「夢を見るつて、どんな夢でせう、こんな小さい子供が」

「それはね、形も色もない夢なんですつて、あの人がさう言つたの、晝間抱かれて街を歩いてると、ぶーつと恐ろしい音

を立てゝ自動車が通つたりするでせう、そのぶーつといふ音だけが夢に出て來るんだらうていふのよ」
「なるほどねえ、そんなものでせうかねえ」
「あなた、まだ目がさめてゐたの」
「ねゝ、どうしても目があはなくて」
いつの間にか飮み足りて眠つた子供を、おしなさんはそーつと腕からはづすと、おしめをとりかへてやつた。おしなさんが再び眠りついてからも、彼女はなか〳〵眠られなかつた。

三

翌朝彼女が目をさましたのは、日が高く昇つてゐる時であつた。傍には子供が一人でねてゐた。彼女はね衣の上に羽織をかけて起き上つた。襖をあけて次の間に出ると、雜巾がけもすんで、からつとあけ放つた玄關で、おしなさんは新聞をひろげてゐた。彼女の足音を聞くと、
「あら、もう起きたの」と、振り返つた。
「すつかりね坊しちまつて、もう何時でせう」
「九時すぎかしら、顏お洗ひなさいよ、今お湯をこつてあげるから」
「いゝえ、私は水で澤山」
そして臺所へ入つてゆくと、ぜん立もすんだらしい卓子の上へ白い布がかけてあつた。
「昨夜はあれからすぐに眠られて？」
おしなさんは、手拭を手にしてそこに立つてゐる彼女の方へ、讀み終へた新聞をたゝんで押しやるやうにしながら尋ねた。

「いゝえ、でも、子供をもつと大變だわねえ、とても私なんかには、一日だつてあの眞似は出來ないわ」

彼女はつく〴〵と感に堪へたやうにかう言つて、去つてゆくおしなさんの、きちんと整つたみなりを見た。

「あなた、髮をあげなさいよ。そして御飯にしませうよ」

おしなさんは、南向の縁側に、これぱかりは昔のおしなさんの面影をのこしてゐるかと思はれる、三尺もある紫檀の大鏡臺をすゑてくれた。

「髮を結ふたつて、鏡をみることなんか、めつたにないのよ」

さう言ひながら、おしなさんは背に陽をうけて黑光りのする鏡の中の、自分の影をのぞいてゐた。

彼女は新聞をたゝんで、鏡臺の前に坐つた。椽の外の竿には、澤山のおしめが、もう弱いかげらうを立てゝゐた。見上げる空はうら〴〵と深い碧色に晴れてゐた。

「まあ、何ていゝ心持だらう、家の中にぐづ〴〵してゐるのは、惜しいやうな日だわねえ」

そして彼女は大きく胸を張つて、思ひきり吸ひ込んでみた。心がかるくはづむやうであつた。彼女はうき〴〵した心持で櫛の手をうごかした。

ふと、彼女は空から目をうつして、鏡の中の自分の影を見た時、彼女はびつくりして櫛をとりおとした。

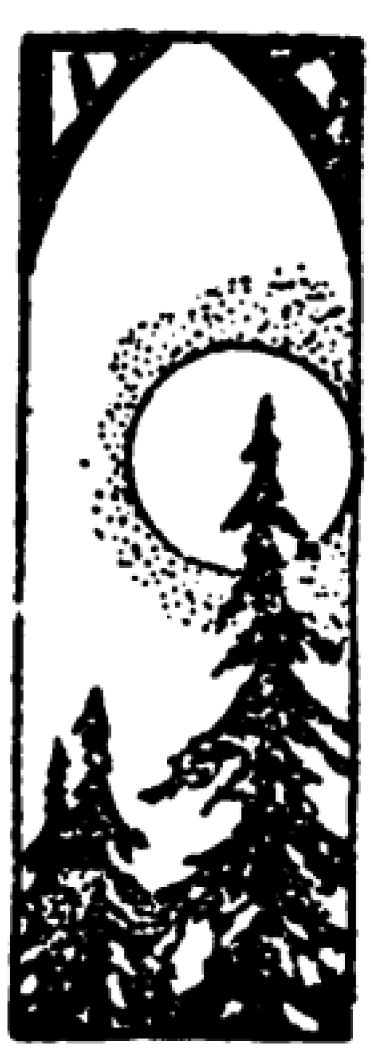
そして、思はず膝をのり出して、自分の顏を鏡とすれ〴〵にして、もう一度見なほした。

けれども、彼女の髮は、やつぱり消炭のやうで艶がなかつた。くつきり富士形をしてゐた筈の生え際は、まるで崩れてしん粉細工のやうな黃色な肌が、髮の間からのぞいてゐた。

「まあ、こんなに」

と、鏡の中で笑つた顏は、更に生氣がなかつた。

「あゝ、駄目だわ、もう私すつかり駄目になつたわ」
と、彼女はつぶやいた。
「いつの間にか、私の若さは皆逃げてしまつたんだもの、きつとあの子がさつていつてしまつたんだわ」
彼女は、深い／＼溜息をした。
どんなにつけ元氣をしたつて、こんな水つ氣のなくなつたやうな體じや、どうにもなりはしないわ」さう思ふと、彼女は彼女の苦勞をしよづていつたと思つてゐたあの子供を何と思つたらいゝのかわからなくなつた。
彼女は、やがて思ひなほして再び櫛をとりあげた。手應へがないほどに薄くなつた髮をとかしてゐると、泪が出て來るので吐息と共にくづをれた。
「あなた、早くいらつしやいよ、おみおつけが熱くなりすぎるわよ」
「はゝ」
けれども彼女は立ち上る勇氣はなかつた。



—〔最新刊〕—

良い家庭の父母と、良い學校の先生へ」

□譯者青木夫人曰く「母になります前にもなりました後にも、子供と言ふ問題に就て、色々の良い事を敎へて呉れましたのが、一米國夫人の著はした此の『母より先生へ』でありました。」

□京大の小西博士曰く「本書は實に子供を眞の子供に迄、人間を眞の人間に迄育てたいと云ふ熱情の表現である。子供を其の天國に復活せしめようとする福音である。」

□コロンビヤ大學のデユウイー博士曰く「本書は現代敎育學說の内の最も基礎的な健全なものを最も解り易く紹介してゐる。正しい敎育觀と、それを實現する手段とを斯く迄單純に明瞭に提示してゐる書物は稀である。」

京都帝國大學敎授文學博士小西重直先生序・靑木文子夫人譯

母より先生へ

（四六版三八〇頁裝幀優雅箱入頗美本）定價金貳圓五拾錢 送料金拾四錢

【内容目次】

一 浮浪兒扱に對する抗議
二 デモクラシーの實行に就て
三 子供の創り出す學校
四 實行に依る敎育
五 干與に依る敎育
六 日常生活の事實の理解を根據とする敎育
附 文明表解說
七 子供の思考力に對して、大人の抱く誤つた優越感。知識の量よりは思想の質
八 發見に依る學習
九 高遠な理想を、生活の手段の犧牲にすることに對する抗議
一〇 子供が話すことを覺えると同時に讀むことを覺えた實例
一一 幼い時分から讀むことを敎へるのは不自然だと云ふ說に對する反駁
一二 一事を學び初めると云ふ事は萬事を學び始めると云ふ事
一三 小供に備へてやる場所は、大人の智慧の殿堂にもなる
一四 新しい學校の實行案

東京・大阪 東洋圖書株式合資會社 發兌

（直接註文一手取扱）大阪市東區上本町一丁目・振替大阪三九五五六番

【圖書總目錄—贈呈】

大正十三年十一月二十二日 第三種郵便物認可
大正十五年八月二十七日 印刷納本
大正十五年九月一日發行 毎月一回一日發行

婦人運動

第四巻
第八號

（定價二十五錢）

